仙台市文化財調査報告書第153集

南小泉遺跡

第20次発掘調査報告書

平成3年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第153集

南小泉遺跡

第20次発掘調査報告書

平成3年3月

仙台市教育委員会

序

南小泉遺跡は、昭和初期に霞ノ目飛行場の拡張工事に際して発見されて以来、弥生・古墳時代の遺跡として注目を集めるところとなりました。その当時の調査のようすについては、長く当市の文化財の保護行政を指導してこられた故伊東信雄先生によりまして、昭和25年に発刊された「仙台市史」に詳しく述べられておるところであります。その後、幾多の方々の研究が行なわれておりますが、なかでも、現在当市の文化財保護委員をお願いいたしております氏家和典先生が、南小泉遺跡から出土した土師器を、東北地方における古墳時代の土器の標準資料として発表なされてからは、広く考古学界に知られるようになっております。

過去、田園地帯の中にあった南小泉遺跡も、現在では住宅地に囲まれ、残る田畑も市街化が進行しておりまして、先学が訪れた当時の面影はなくなりつつあるようです。南小泉遺跡周辺の開発にともない、昭和53年頃より正式な発掘調査が次々に行なわれるようになり、本調査で第20次を数えるまでになりました。この間の調査によりまして、同遺跡は弥生・古墳時代だけでなく、古くは縄文時代、新しくは平安時代・中世、さらに若林城に関連する近世の遺構群をも包括する複合遺跡であることがわかってまいりました。

今回の調査は遺跡の南端で実施され、古代の住居跡等が発見されております。本書が南小泉遺跡、また考古学研究の資料となれば幸いであります。皆様の御批評・御教示をお願いいたします。

平成3年3月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒英

例　　言

1．本報告書は、我妻不動産株式会社による、宮城県仙台市に所在する南小泉遺跡内の、道路敷設工事に伴う、事前調査の報告書である。

2．本書の編集・執筆は仙台市教育委員会文化財課の工藤哲司が担当した。遺物の実測にあたっては同課の荒井　格の助力を得た。

3．本書で複製使用した建設省国土地理院発行の地形図については、図中に示した。

4．本書の記述における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1970）に基づく。

5．本調査において検出された遺構については、次の遺構略号を使用し、発見順にそれぞれの遺構毎に番号を付した。

ＳＢ＝　掘立柱建物	ＳＤ＝　溝　跡	ＳＩ＝　竪穴住居跡
ＳＫ＝　土　坑	Ｐ　＝　ピット	ＳＸ＝　その他の遺構

6．本調査では、出土遺物の分類と登録にあたって、下記の分類と、分類記号を使用した。

Ａ＝縄文土器	Ｈ＝その他の瓦	Ｏ＝自然遺物
Ｂ＝弥生土器	Ｉ＝陶器（その他の土器）	Ｐ＝土製品
Ｃ＝非ロクロ土師器	Ｊ＝磁器	Ｑ＝骨角製品
Ｄ＝ロクロ土師器	Ｋ＝石器・石製品	Ｒ＝紙・布
Ｅ＝須恵器	Ｌ＝木器・木製品	Ｓ＝埴輪
Ｆ＝丸瓦・軒丸瓦	Ｍ＝木簡	Ｘ＝その他の遺物
Ｇ＝平瓦・軒丸瓦	Ｎ＝金属製品	

7．溝跡の断面図の実測ポイントのａ～ｆの符号と、遺構配置図の符号は一致している。

8．遺構平面図中に任意に散らばってある数値（例＝10.87）は、その地点の標高を示し、単位はｍである。

9．遺構平面図において、住居跡内のピットの番号の下または脇の（　）内に－を付けて示した数値は、床面または周溝底面からの各ピットの深さで、単位はcmである。

10．土器の実測図において、中心線が一点破線のものは、復元径によるものである。

11．土師器のうち、黒色処理されたものには、その面の一部にスクリーントーンを貼って示してある。

12．本調査に関わる出土遺物・各種実測図及び写真は、仙台市教育委員会が一括して保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．調査の経緯 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査要項 …… 2
Ⅱ．遺跡の環境 …… 2
1．南小泉遺跡の位置と地理的環境 …… 2
2．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査方法と基本層位 …… 10
1．調査方法 …… 10
2．基本層位 …… 11
Ⅳ．発見遺構と出土遺物 …… 12
1．表土層の出土遺物 …… 12
2．掘立柱建物跡 …… 15
ＳＢ－１……15　ＳＢ－２……16
3．溝　跡 …… 16
ＳＤ－１……16　ＳＤ－２……16　ＳＤ－３……16
ＳＤ－４……17　ＳＤ－５……17　ＳＤ－６……17
ＳＤ－７……18
4．竪穴住居跡 …… 18
ＳＩ－１……18　ＳＩ－２……28　ＳＩ－３……30
ＳＩ－４……31
5．土　坑 …… 37
ＳＫ－１……37　ＳＫ－２……37　ＳＫ－３……37
ＳＫ－４……37　ＳＫ－５……37　ＳＫ－６……37
6．その他の遺構 …… 38
ＳＸ－２……38
Ⅴ．考察と調査のまとめ …… 38
1．住居跡出土土器の分類と年代 …… 38
2．溝跡・掘立柱建物跡・土坑・その他の遺構の年代 …… 44
3．ＳＩ－１・２・４竪穴住居跡の関係について …… 44
4．調査のまとめ …… 46

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第2図　第20次調査区の位置と過去の調査区……7
第3図　建設予定街路と調査区配置図……9
第4図　南小泉遺跡第20次調査遺構配置図……10
第5図　基本層位断面図……11
第6図　表土出土遺物実測図……13
第7図　SB－1掘立柱建物跡実測図……14
第8図　SB－2掘立柱建物跡実測図……15
第9図　溝跡断面実測図……17
第10図　SI－1竪穴住居跡実測図……21
第11図　SI－1竪穴住居跡カマド実測図……23
第12図　SI－1竪穴住居跡出土遺物実測図(1)……24
第13図　SI－1竪穴住居跡出土遺物実測図(2)……25
第14図　SI－1竪穴住居跡出土遺物実測図(3)……26
第15図　SI－1竪穴住居跡出土遺物実測図(4)……27
第16図　SI－2竪穴住居跡実測図……29
第17図　SI－2竪穴住居跡出土遺物実測図……30
第18図　SI－3竪穴住居跡実測図……31
第19図　SI－3竪穴住居跡出土遺物実測図……32
第20図　SI－4竪穴住居跡実測図……33
第21図　SI－4竪穴住居跡出土遺物実測図……34
第22図　土坑実測図……36
第23図　SX－2遺構実測図……23
第24図　須恵器坏法量比較図……40

表目次

第1表　南小泉遺跡次数別調査成果一覧表……5
第2表　出土土器分類表……41
第3表　SI－1・2・4竪穴住居跡出土土師器集計表……45
第4表　登録遺物目録……48

写真目次

写真－1　遺跡遠景……50
写真－2　調査区全景（南より）……51
写真－3　調査区全景（西より）……51
写真－4　基本層断面……52
写真－5　SB－1掘立柱建物跡柱穴断面……52
写真－6　SB－1掘立柱建物跡……52
写真－7　SB－2掘立柱建物跡・SD－1・2・3溝跡……53
写真－8　SB－2掘立柱建物跡柱穴断面1……53
写真－9　SB－2掘立柱建物跡柱穴断面2……53
写真－10　SD－7溝跡・SI－1竪穴住居跡床面検出状況……53
写真－11　SI－1竪穴住居跡床面遺構完掘状況……54
写真－12　SI－1竪穴住居跡貼床下検出遺構完掘状況……54
写真－13　SI－1竪穴住居跡掘り方完掘状況……55
写真－14　SI－1竪穴住居跡柱穴断面(P.9)……55
写真－15　SI－1竪穴住居跡柱穴断面(P.2)……55
写真－16　SI－1カマド・煙道・遺物出土状況……56
写真－17　SI－1カマド左袖縦断面……56
写真－18　SI－1カマド左袖横断面……56
写真－19　SI－1内SK－9土坑断面……56
写真－20　SI－1内SK－13土坑断面……56
写真－21　SI－2竪穴住居跡完掘状況……57
写真－22　SI－2竪穴住居跡掘り方完掘状況……57

写真－23　SI－3 竪穴住居跡遺物出土状況 ……58
写真－24　SI－3 竪穴住居跡床面検出状況 ……58
写真－25　SI－4 竪穴住居跡支柱穴（P.2）
　　断面……59
写真－26　SI－4 竪穴住居跡床面検出及び
　　遺物出土状況……59
写真－27　SI－4 竪穴住居跡掘り方完掘状況・
　　SD－6 溝跡 ……59
写真－28　SK－2 土坑 ……60
写真－29　SK－3 土坑 ……60
写真－30　SK－4 土坑 ……60
写真－31　SK－5 土坑 ……60
写真－32　SK－6 土坑 ……60
写真－33　SX－2 遺構 ……60
写真－34　非ロクロ土師器(1)……61
写真－35　非ロクロ土師器(2)……62
写真－36　ロクロ土師器……63
写真－37　須恵器(1)……64
写真－38　須恵器(2)・鉄製品……65
写真－39　石器・土製品……66

南小泉遺跡 第20次発掘調査報告書

Ⅰ．調査の経緯

1．調査に至る経緯

今回の南小泉遺跡の調査は、昭和63年11月24日、宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字鶴ヶ湊51我妻不動産株式会社　代表取締役　我妻倹吉氏より、仙台市長宛に当該地での倉庫建設及び関連道路の敷設工事に関わる「開発行為事前協議願書」が提出されたことを起因とする。当該地は南小泉遺跡として周知されていたため、当市教育委員会の埋蔵文化財担当課である文化財課との協議も行われ、平成元年２月17日に、①．当該地の遺跡発掘届けを提出すること、②．工事着手前に発掘調査を実施すること、③．調査は仙台市教育委員会が実施すること、④．調査に要する費用は開発者の負担とすること、⑤．調査の詳細は追って協議すること、を条件に協議が成立した。

協議事項の①による遺跡の発掘届けは、平成元年８月16日に、当市教育長宛に提出された。この時点で、調査の実施時期は平成２年４月以降ということが、当市教育委員会と開発者の間で了承された。またこの間に、倉庫については地下遺構に影響のない基礎構造とするように教育委員会では申し入れ、開発者の了承が得られた。これにより本件に係わる発掘調査は、道路部分に限定して実施することになった。

調査についての具体的協議は平成２年３月下旬に行い、調査期間を平成２年４月から６月とした。なお、この時点で開発者から倉庫の建築計画を変更し、高層住宅の建築計画が出された。この計画の場合は地下遺構に重大な影響を及ぼすので、計画地区内の発掘調査の実施が必要となるが、これについては平成２年度の調査計画に入れることは面積的に不可能なため、平成３年度以降に調査を実施することで協議が成立した。

仙台市と開発者との「発掘調査委託契約」は平成２年４月10日に締結され、調査期間は報告書の作製を含め、平成２年４月11日から平成３年３月31日とした。この契約に基づき、野外調査は平成２年４月16日から実施し、５月30日に終了した。報告書の作製に関わる整理作業は、平成２年11月28日に開始し、平成３年３月20日に終了した。

なお、調査期間中の平成３年５月14日には、仙台市立遠見塚小学校の６年生の児童百余名が見学に訪れ、郷土学習を行なった。

2．調査体制

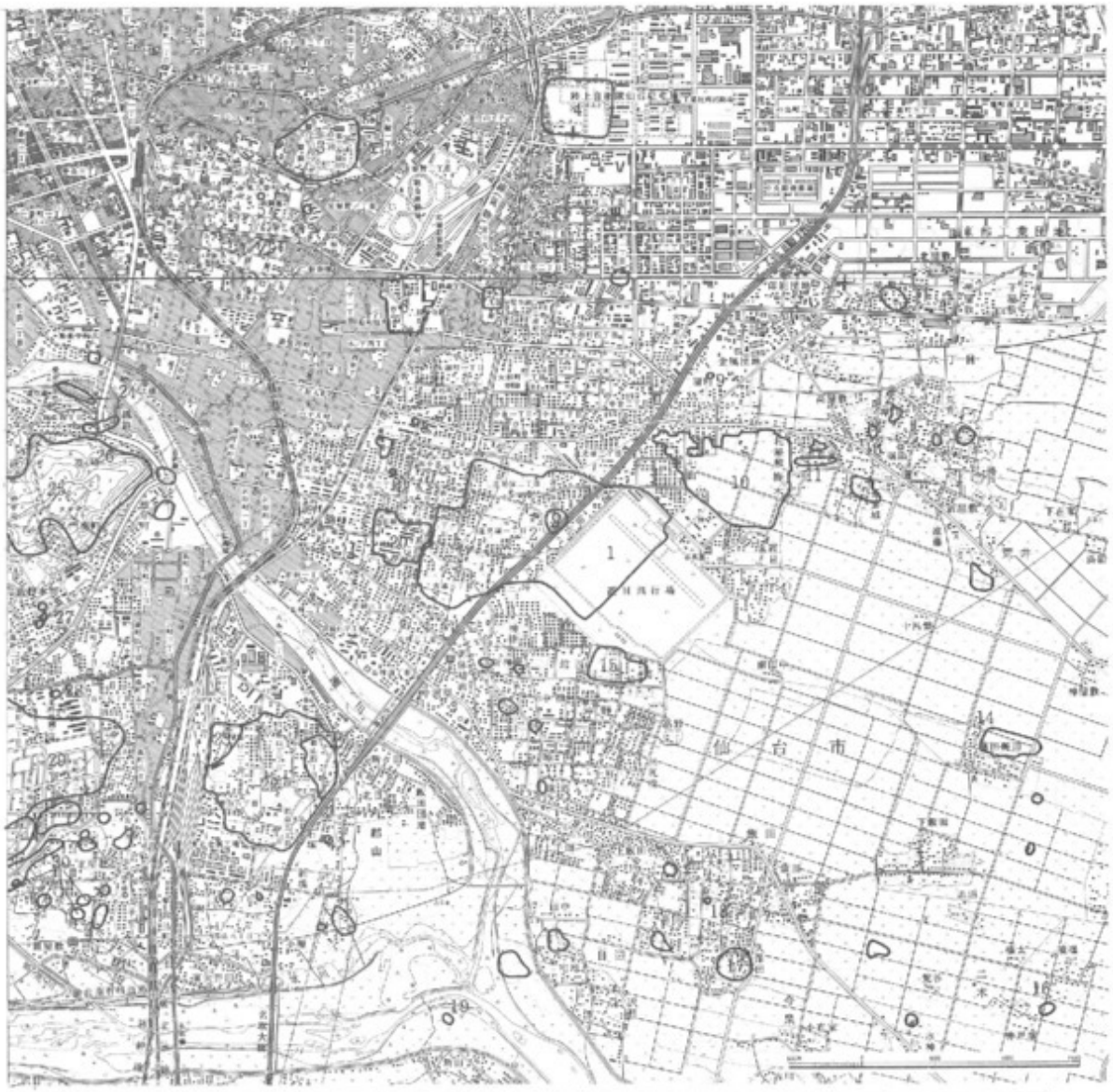
遺跡名	南小泉遺跡
調査名	南小泉遺跡第20次発掘調査
調査地点	仙台市若林区古城三丁目432－4 他
対象面積	555㎡
調査面積	260㎡
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
担当職員	工藤哲司・荒井　格
調査期間	平成２年４月11日～平成２年５月30日
整理期間	平成２年11月28日～平成３年３月20日
調査参加者	芦野徳松・芦野ヒデ子・阿部利大・板橋祝子・遠藤辰男・大泉照美・小野寺貴子・菊地和江・黒瀬クラコ・小林みよ子・佐藤愛子・佐藤久栄・佐藤弘子・佐藤よし子・篠原良子・柴田　明・庄子カツイ・庄子徳治・鈴木春江・田中スエ・玉手美喜男・平野真美・藤代まゆみ・山崎光雄・横川　健・渡部晃子
調査協力	高橋秋寿

II．遺跡の環境

1．南小泉遺跡の位置と地理的環境

仙台市の地形は西半部と東半部とに大きく二分される。西半部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵と、名取川の支流広瀬川がその中流域に形成した段丘地形からなる。この段丘は古期から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名され、伊達政宗の開府以来、現在に至るまでの仙台の中心市街地はこれらの段丘地帯に形成されている。

これに対し東半部は、幅約10kmに及ぶ「宮城野海岸平野」が、北は宮城郡七ヶ浜町から南は亘理郡山元町まで40kmに渡って三日月形に広がっている。この沖積平野は奥羽山脈に水源を発する七北田川・名取川・阿武隈川の運搬物に因って形成され、流域には扇状地・自然堤防・後



№	遺跡名	種別	立地	年代	№	遺跡名	種別	立地	年代
1	寄小泉遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良～近世	16	三本塚遺跡	前方後円墳？	自然堤防	古墳
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	17	今泉遺跡	集落城館	自然堤防	弥生・古墳・奈良～近世
3	国分寺館跡	城館	段丘	中世	18	梅塚古墳	円墳？	沖積平野	古墳
4	赤日城跡	城館	沖積平野	中世	19	仙台大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	亀齢寺境内古墳	円墳？	沖積平野	古墳（後）	20	岩林城跡	古墳・城館	自然堤防	古墳・中世～近世
6	陸奥国分寺跡	寺院跡	沖積平野	奈良・平安	21	猫塚古墳	円墳？	沖積平野	古墳
7	陸奥国分尼寺跡	寺院跡	沖積平野	奈良・平安	22	郡山遺跡	官衙・包含地	自然堤防	縄文・弥生・古墳～中世
8	法領塚古墳	円墳	沖積平野	古墳（後）	23	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳
9	曽根松明神古墳	円墳？	沖積平野	古墳	24	向山横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳（後）
10	仙台東郊桑畠	桑畑跡	沖積平野	奈良？	25	茂ヶ峰城跡	城館	丘陵	中世
11	中在家南遺跡	包含地	沖積平野	弥生・古墳・平安～近世	26	大年寺横穴群	横穴	丘陵斜面	古墳（後）
12	押口遺跡	包含地	沖積平野	弥生・古墳・平安～近世	27	一塚古墳	円墳	段丘	古墳
13	高柳遺跡	包含地	沖積平野	古墳・平安	28	金剛八幡古墳	円墳	自然堤防	古墳（後）
14	郡山新田遺跡	集落跡	低湿	弥生・古墳	29	宮沢遺跡	水田跡・包含地	後背湿地	田石器・縄文・弥生～近世
15	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	30	大野田古墳群	円墳地	自然堤防	古墳

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

背湿地・旧川道など沖積地特有の地形を形成している。また沿岸部には幅２kmに渡って４列の浜堤が形成されている。「宮城野海岸平野」の形成層は上部から順に深沼層（層厚０～５m…砂丘堆積層）・霞ノ目層（層厚１～５m…氾濫原堆積層）・福田町層（層厚0.5～10m…湖沼・湿地堆積層）・岩切層（層厚10～30m…浅海堆積層）から成っている。沖積地も近年急速に都市化が進んでいるが、段丘地帯と対照的に水田や畑地がなお多く残され近郊農業地帯を成している。

南小泉遺跡は、下町段丘の東端から1.5kmほど東の「宮城野海岸平野」中央西寄りの発達した広範な自然堤防上に立地している。深沼層の堆積環境にない沖積平野の内陸部では、霞ノ目層が表層と成っており、本遺跡はその上部に形成されている。標高は10m前後で、遺跡の立地する自然堤防の北・東・南の３方向きには後背湿地が広がっている。遺跡は東西約1.5km・南北0.9km、面積1,250,000㎡を計るが、住宅地が大部分を占め、残っている畑地や水田も急速に宅地化されている。

２．周辺の遺跡と歴史的環境

南小泉遺跡の発見の契機は、昭和14年から16年にかけての霞ノ目飛行場拡張工事に際し、ここから弥生時代及び古墳時代の多くの遺構・遺物が出土し、これを故松本源吉氏や伊東信雄氏をはじめとする先学が採集したことによる。以来、仙台市の弥生時代・古墳時代を代表する遺跡として知られている。遺跡の本格的な調査は、昭和52年の範囲確認調査に始まり、以来20次を数える発掘調査が実施されている。

これまでの発掘調査地点とその調査概要は第２図と第１表に示した通りで、遺物は弥生時代前期以降近世に至るまで各時期の各種ものが出土している。遺構については、弥生時代のものは、昭和14年から16年の飛行場拡張工事の際に15基以上の合口土器棺が検出された以後は、遺物の出土にもかかわらず、飛行場に近い12次調査で溝が１条検出されているに過ぎない。住居跡が検出されているのは、古墳時代の中期からで、この時期になると遠見塚古墳を囲むように各地点で住居跡が検出される。古墳時代末期から奈良時代にかけて遺構の検出は再び稀薄になるが、平安時代になると竪穴住居跡や掘立柱建物跡がかなりの数検出され、竪穴住居跡の分布も南小泉遺跡西方の若林城跡にも及ぶ。

南小泉遺跡周辺の広瀬川北岸の沖積地には、広瀬川と名取川に挟まれた郡山低地のような縄文時代及びそれ以前の遺跡は発見されておらず、この地域の遺跡の形成は弥生時代以降と考えられている。この頃の遺跡としては藤田新田遺跡や中在家南遺跡がある。藤田新田遺跡は弥生土器と共に石庖丁や小形片刃石斧等が出土している。中在家南遺跡は自然堤防と旧川道に渡って形成され、自然堤防上からは中期の土壙墓４基と土器棺墓１基が検出され、旧川道からは弥

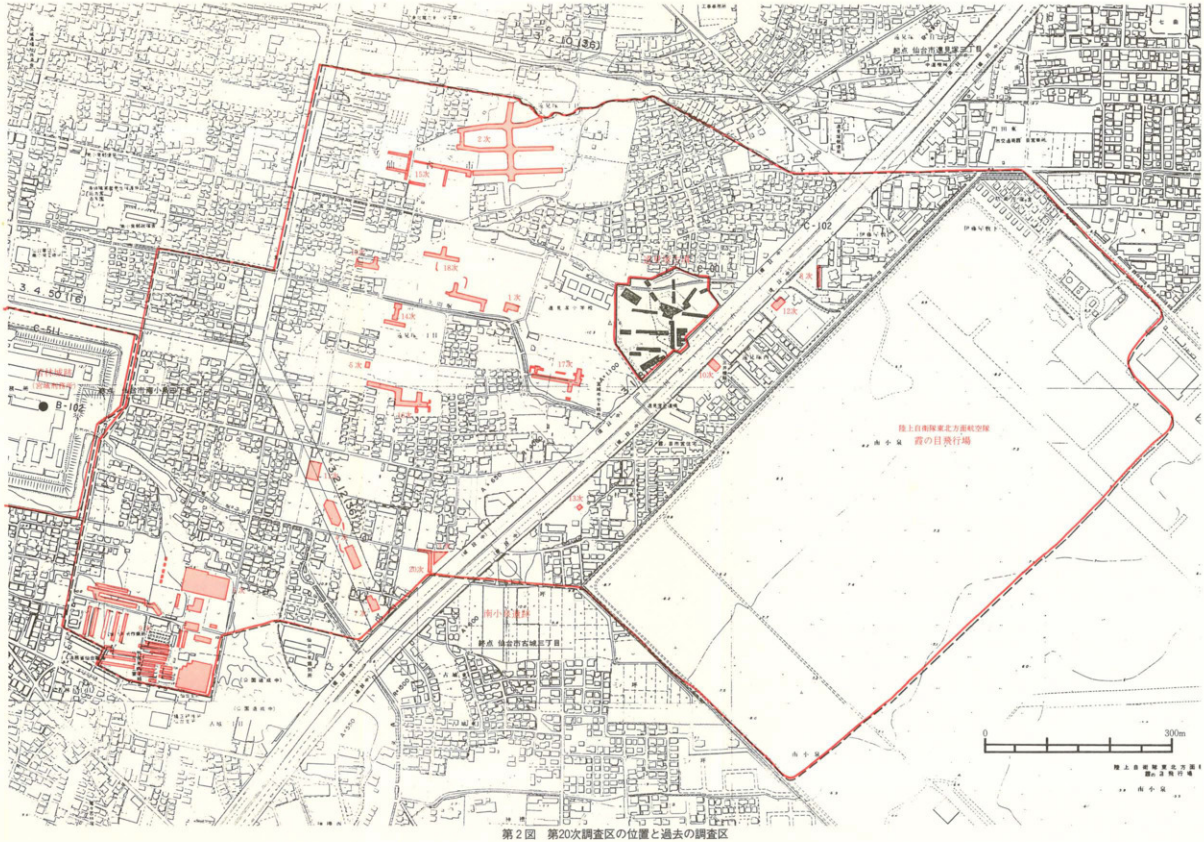
第１表　南小泉遺跡次数別調査成果一覧表

調査次数(調査年)	遺構時期	検出遺構	出土遺物	文献
(昭和14年～16年) ※遺構の詳細は不明	弥生時代中期 古墳時代	住居跡？　合口土器棺(15基以上)。 住居跡。	弥生土器(桝形囲式)。石器(石斧・石ノミ・石庖丁・石鏃・石匙・多頭石斧・石錘・凹石・磨石・石杵)。土師器(塩釜式・南小泉式)。石製模造品。	1
第１次(昭和52年)	平安時代 不明	溝状遺構。 小溝状遺構。	弥生土器(桝形囲式)。土師器(南小泉式・表杉ノ入式)。須恵器。陶磁器。瓦。石器(剥片)。石製品。石製模造品。鉄製品。	2
第２次(昭和53年)	――	――	弥生土器。土師器(南小泉式)。須恵器。	3
第３次(昭和55年)	平安時代	住居跡(１軒)。	土師器(表杉ノ入式)。須恵器。	4
第４次(昭和56年)	古墳時代中期 平安時代 中世 不明	住居跡(５軒)。土坑。土壙状遺構。焼土遺構。溝跡。 住居跡(10軒)。土坑。溝跡。 掘立柱建物跡(４棟)。土坑。溝跡。ピット ピット。	弥生土器(大泉式？・十三塚式)。土師器(南小泉式・表杉ノ入式)。須恵器。陶磁器(中・近世)。瓦(古代)。土製品(土錘、羽口等)。石器(石鏃、スクレイパー等)。石製品(管玉、小玉、紡錘車、砥石、硯等)。石製模造品。鉄製品(鏃、刀子、鎌、釘等)。銅製品(中国銭)。	5
第５次(昭和56年)	不明	竪穴状遺構。土坑。溝跡。	土師器(南小泉式・栗囲式・表杉ノ入式)。	6
第６次(昭和56～57年)	平安時代以前 平安時代 近世以降 不明	溝跡。 住居跡(2軒)。掘立柱建物跡(4棟)。土坑。 井戸跡。 掘立柱建物跡。土坑。井戸跡。溝跡。	弥生土器(大泉式)。土師器(南小泉式・栗囲式・国分寺下層式・表杉ノ入式―墨書土器含―)。赤焼土器。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦(古代)。土製品(土玉等)。石製品(石庖丁、石帯、砥石等)。風字硯。鉄製品(鏃先、鏃、刀子、鉄滓等)。銅製品(古銭等)。動植物遺体。	7
第７次(昭和57年)	平安時代以前 平安時代 平安時代以降 近世 不明	土坑。小溝状遺構。溝跡。 住居跡(2軒)。土坑。性格不明遺構。ピット。 溝跡。 井戸跡。 土坑。溝跡。ピット。	弥生土器(桝形囲)。土師器(南小泉～引田式・表杉ノ入式)。須恵器。陶器(近世)。瓦(古代・近世)。土製品(羽口)。石器(石鏃等)。石製品(紡錘車、石臼等)。鉄製品(鏃先、釘？、鉄滓等)。動植物遺体。	8
第８次(昭和57年)	――	土坑。	弥生土器。土師器(南小泉式)。	9
第９次(昭和57年)	平安時代 中世 桃山～江戸初頭 不明	住居跡(２軒)。 溝跡。 掘立柱建物跡(２棟)。井戸跡。 土坑。井戸跡。溝跡。	土師器(表杉ノ入式)。須恵器。土師質土器。陶器(中世・近世初頭)。瓦(古代)。石製品(砥石、石鉢)。金属製品(中国銭)。漆器。	10
第10次(昭和57年)	古墳時代中期 不明	住居跡(５軒)。 掘立柱建物跡？。土坑。溝跡。ピット。	弥生土器(桝形囲式・十三塚式)。土師器(南小泉式)。須恵器。石器(石鏃等)。石製品(紡錘車、砥石等)。石製模造品。	11
第11次(昭和58年)	古墳時代後期 古墳時代末期 平安時代 中世 桃山～江戸初頭	住居跡(４軒)。土坑。溝跡。 住居跡(１軒)。 住居跡(3軒)。掘立柱建物跡(2棟)。土坑。 掘立柱建物跡(３棟)。土坑。溝跡。墓壙。 土倉跡。土坑。溝跡。	弥生土器(大泉式)。土師器(住社式・住社式併行・国分寺下層式・表杉ノ入式―墨書土器含―)。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦。土製品(土錘)。石器(石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、石核等)。石製品(勾玉、石庖丁、砥石等)。石製模造品。板碑。鉄製品(刀子、釘、鉄滓等)。銅製品(鞘、煙管、中国銭)。骨(加工痕)。炭化米。動植物遺体。	12
第12次(昭和59年)	弥生時代中期 弥生時代後期 古墳時代中期 奈良時代 不明	溝跡。 土坑。 住居跡(１軒)。土坑。溝跡。ピット。 土坑。ピット。 溝跡。ピット。	弥生土器(桝形囲式、十三塚式、天王山式併行)。土師器(南小泉式・国分寺下層式)。須恵器。陶磁器(中世・近世)。瓦(近世)。土製品(羽口)。石器(石鏃、石錐、不定形石器、石核、剥片等)。石製品(石庖丁？、砥石等)。鉄製品(鏃、刀子、鉄滓等)。	13
第13次(昭和59年)	古墳時代中期 不明	住居跡(１軒、建て替えあり)。 溝跡。	土師器(南小泉式)。須恵器。陶磁器。石器(剥片)。石製模造品。鉄製品(鏃)。植物遺体。	14
第14次(昭和61年)	古墳時代中期 平安時代 中世 近世	住居跡(４軒)。溝跡(４条)。土坑(３基)。河川跡(１条)。 住居跡(３軒)。溝跡(１条)。土坑(３基)。掘立柱建物跡(１棟)。畝状遺構(３ヶ所)。 溝(３条)。 掘立柱建物跡(４棟)。井戸跡(２基)。土坑(１基)。	土師器(南小泉式)。須恵器。土製品(土錘)。石器(磨石・敲石)。石製品(紡錘車・石製模造品・砥石)。鉄製品(刀子・釘)。古銭。瓦(古瓦・燻瓦・金箔瓦)。陶器(美濃灰釉碗・美濃灰釉丸皿・唐津鉄釉擂鉢)。	15
第15次(昭和63年)	古墳時代中期 不明	住居跡(３軒)。土坑(１基)。性格不明遺構(１基)。 溝跡(３条)。	土師器(南小泉式)。須恵器。石製品(紡錘車・石製模造品)。瓦。鉄滓。石器(剥片)。	16
第16次(昭和63年)	古墳時代中期 中世	住居跡(９軒)。竪穴遺構(１基)。土坑(５基)。溝(２条)。 (城館と屋敷)溝(11条)。掘立柱建物跡(５棟以上)。土坑(４基)。土塁(１	弥生土器(青木畑式・桝形囲式・十三塚式・天王山式)。土師器(南小泉式・引田式・表杉ノ入式)。須恵器(古墳～平安)。土製品(羽口)。石器(スクレイパー、石鏃)。石製品(砥石・石製模造品・硯・紡錘車)。鉄製品(刀子・鉄鍋・釘)。銅製品(金具・煙管)。中国銭。瓦(古代・近	17

調査次数(調査年)	遺構時期	検出遺構	出土遺物	文献
第16次(昭和63年)	中世 近世 不明	木)。橋脚跡(1基)。集石(1基)。 掘立柱建物跡(1棟)。溝跡(1条)。 土坑(2基)。	器)。陶磁器(山茶碗・瓦器碗・土師質土器他)。鉄滓(5c代)。漆器椀。馬歯。骨片。炭化米。	17
第17次(昭和63年)	古墳時代中期 古墳時代後期 中世 近世 不明	住居跡(15軒)。土坑(2基)。 住居跡(3軒)。溝跡(2条)。 掘立柱建物跡(10棟)。土坑(13基)。 溝跡(7条)。井戸跡(1基)。柱穴列(1例)。橋?(1基)。 掘立柱建物跡(4棟)。土坑(1基)。 溝跡(中世から継続)。 土坑(7基-古墳時代中期以前)。溝跡(1条)。	縄文土器(大木10式～南境式)。弥生土器(青木畑式・榊形前式・十三塚式)。土師器(南小泉式～住社式・表杉ノ入式)。須恵器(5c～平安)。土製品(塩竈・羽口・土玉)。石器(スクレイパー・石鏃・石錐・敲石)。石製品(石製模造品・管玉・勾玉・砥石・茶臼)。鉄製品(釘・刀子)。銅製品(金具・擬文鏡?)。鉛製鏡片。中国銭。瓦(古代・近世)。陶磁器(瓦質土器・土師質土器)。馬歯。鉄滓(中世～近世)。	17
第18次(昭和63年)	弥生時代中期以前 古墳時代中期以前 古墳時代後期 奈良～平安時代 中世 近世 不明	埋没河川跡(1条)。 埋没河川跡(4条)。 住居跡(2軒)。竪穴遺構(1基)。土坑(9基)。溝跡(3条)。放状遺構(2ヶ所)。性格不明遺構(2基)。 住居跡(1軒)。土坑(1基)。溝跡(4条)。放状遺構(4ヶ所)。 掘立柱建物跡(6棟)。土坑(2基)。溝跡(6条)。柱穴列(1列)。 塚(1基-径5m)。 住居跡(1基-古墳時代?)。土坑(2基)。	弥生土器(榊形前式以前・十三塚式・天王山式)。土師器(南小泉式～住社式・国分寺下層式～表杉ノ入式)。須恵器(5c～平安)。石器(スクレイパー)。石製品(石製模造品・琥珀製切子玉)。瓦(古代・近世)。陶磁器(土師質土器他)。	17
第19次(平成元年)	縄文時代晩期 古墳時代中期 中世 近世 不明	包含層。 性格不明遺構(2基)。 溝跡(1条)。掘立柱建物跡(3棟)。Pit多数。 井戸跡(1基)。 土坑(4基)。溝跡(1条)。性格不明遺構(3基)。	縄文土器(大洞A')。土師器(南小泉式・表杉ノ入式)。須恵器。石器(剥片石器)。石製品(石製模造品)。鉄製品(鏃・釘)。平瓦。陶磁器(土師質土器)。	18
第20次(平成2年)	古墳時代前期 平安時代 不明	住居跡(1軒)。 住居跡(3軒)。掘立柱建物跡(1棟)。 掘立柱建物跡(1棟)。溝跡(7条)。 土坑(6基)。性格不明遺構(1基)。	土師器(塩釜式・表杉ノ入式)。須恵器。石器(有角石器・石錐片・石匙)。鉄製品(斧刃状・棒状)。土製品(紡錘車)。陶器。	19

文献

1 伊東信雄 「仙台市内の古代遺跡」仙台市史3 (昭和25年)
2 仙台市教育委員会 第13集 南小泉遺跡—範囲確認調査報告書— (昭和53年3月)
3 南小泉遺跡調査団 南小泉遺跡発掘調査報告書 (昭和54年3月)
4 仙台市教育委員会 第28集 年報2 (昭和56年3月)
5 仙台市教育委員会 第35集 南小泉遺跡…都市計画街路第1次調査報告… (昭和57年3月)
6 仙台市教育委員会 第41集 年報3 (昭和57年3月)
7 仙台市教育委員会 第55集 南小泉遺跡…青葉女子学園地内調査報告… (昭和58年3月)
8 仙台市教育委員会 第52集 南小泉遺跡…都市計画街路第2次調査報告… (昭和58年3月)
9 仙台市教育委員会 第57集 年報4 (昭和58年3月)
10 宮城県教育委員会 南小泉遺跡 (昭和58年3月)
11 仙台市教育委員会 第60集 南小泉遺跡…倉庫建設関係調査報告… (昭和58年3月)
12 仙台市教育委員会 第68集 南小泉遺跡…都市計画街路第3次調査報告… (昭和59年3月)
13 仙台市教育委員会 第80集 南小泉遺跡…第12次発掘調査調査報告… (昭和60年3月)
14 仙台市教育委員会 第81集 南小泉遺跡…第13次発掘調査調査報告… (昭和60年3月)
15 仙台市教育委員会 第109集 南小泉遺跡…第14次発掘調査調査報告… (昭和62年3月)
16 仙台市教育委員会 第131集 南小泉遺跡…第15次発掘調査調査報告… (平成元年3月)
17 仙台市教育委員会 第140集 南小泉遺跡…第16・17・18次発掘調査調査報告… (平成2年3月)
18 仙台市教育委員会 第141集 南小泉遺跡…第19次発掘調査調査報告… (平成2年3月)
19 仙台市教育委員会 第153集 南小泉遺跡…第20次発掘調査調査報告… (平成3年3月)
※市教委第140・141集は現在編集中。



第２図　第20次調査区の位置と過去の調査区

生時代中期から中世に至る各時期の農具等の木製品が出土している。

古墳時代の遺跡としては、前期末ないし中期初頭に位置付けられ、全長110mを誇る遠見塚古墳、埴輪を有する若林城内古墳、後期の法領塚古墳、猫塚古墳等の古墳がある。しかし、南小泉遺跡以外の周辺の遺跡では、この時期の集落は発見されていない。

古墳時代末・7世紀後半になると、広瀬川対岸の郡山低地に官衙遺跡とその付属寺院である郡山遺跡が造営され、この地も律令政府の直接的支配を受けるようになる。この時期の市内の集落の中心地域は郡山低地となるようで、南小泉遺跡での住居跡の減少に対し、多数の住居跡が検出されている。やがて8世紀初頭に郡山遺跡が廃されるのと前後して多賀城が造営されると、南小泉遺跡の北側に近接して陸奥国分寺・同尼寺が建立され、同地区周辺は陸奥国の中心となる。奈良時代末から平安時代になると南小泉遺跡にも住居跡が再び増加する。

中世の遺跡としては沖野城跡があり、南小泉遺跡内からもこの頃の掘立柱建物跡や堀跡が検出されている。さらに江戸時代初頭に若林城が築城されると南小泉遺跡の西半部は、同城の城

第3図　建設予定街路と調査区配置図

第４図　南小泉遺跡第20次調査遺構配置図

下町としての性格を周辺地域とともに有するようになる。

以上のように、南小泉遺跡は弥生時代以来、広瀬川北岸の中心的遺跡として周辺遺跡と相互の関連を以て営まれた遺跡である。

III．調査方法と基本層位

１．調査方法

今回の調査地点は南小泉遺跡南辺の中央に位置する。調査に関わる建設予定街路の現況は、北東角が南方に折れる「形の街路で、北側が非舗装道路、東側は畑地となっており、調査対象面積は555㎡を計る。北辺のうち西半部は自動車の通る生活路となっているため調査を断念し

た。また東半部も歩行者通路の確保の必要性からその南半分だけの調査を実施した。

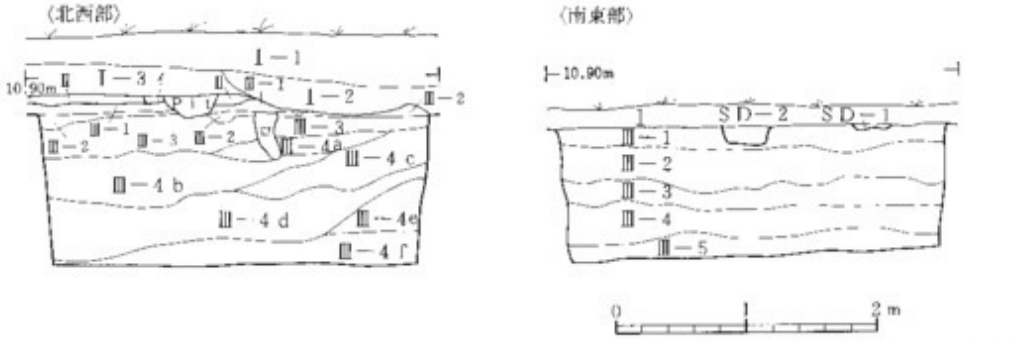
表土の排除はバックホーによって行い、遺構の検出作業を行いながら一部調査区を拡張し、最終的には260㎡を調査した。

測量の基準は、調査区の北東角付近の任意の点を原点（N－0－S・W－0－E）とし、原点で磁北から7°40′東に振った線とこれに直交する線を略真南北・東西基準線とした。測量に当たっては、基準線に沿った原点からの距離を、各方向毎にN－　、S－　、W－　、E－　で表わした。地籍図と調査区との合成（調査区配置図）は、測量原点から計測した境界杭によった。

2．基本層位

南小泉遺跡の立地する地域はシルト質の土壌が主体となり、これにその時々の堆積状況により粘土や砂が混入している。本調査では基本層位の把握のため、北西部と南東部の2地点でそれぞれ現地表から180cmと120cmの深掘りを行った。（第4・5図）両地点及び調査区全体の状況から、この付近の基本層位は次の3層に大別された。

第Ⅰ層　　水田及び畑の耕作土からなる表土で、盛土のため近年までの水田耕作土が残って



＜北西部＞

層 No.	土　色	土　質	その他
Ⅰ－1			盛土（川砂）
Ⅰ－2	10YR5/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を粒状に多量に含む。
Ⅰ－3	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	耕作土
Ⅱ	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土のブロックを含む。
Ⅲ－1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土粒をわずかに含む。
Ⅲ－2	7.5YR4/4褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒を含む。
Ⅲ－3	10YR4/6褐色	粘土質シルト	灰褐色土粒を含む。
Ⅲ－4a	10YR4/4褐色	粘土質シルト	灰褐色土粒を含む。
Ⅲ－4b	7.5YR4/4褐色	シルト	西側（図の左方）に砂を多量に含む。
Ⅲ－4c	10YR5/6褐色	粘土質シルト	
Ⅲ－4d	10YR5/6黄褐色	砂	
Ⅲ－4e	10YR4/6褐色	砂	灰色の砂を含む。
Ⅲ－4f	10YR4/2灰黄褐色	砂	褐色の砂をブロック状に含む。
イ	10YR4/4褐色	粘土質シルト	
ロ	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	

＜南東部＞

層 No.	土　色	土　質	その他
Ⅰ	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	水田から畑に転換された耕作土
Ⅲ－1	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	
Ⅲ－2	10YR5/8黄褐色	砂質シルト	
Ⅲ－3	10YR4/6褐　色	シルト質砂	
Ⅲ－4	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	
Ⅲ－5	10YR6/3にぶい黄橙色	粘　土	

第5図　基本層位断面図

いる北西部はにぶい黄褐色の粘土質シルト、水田から畑に転換された南東部は暗褐色の粘土質シルトとなっている。層厚は15～25cm。

第II層　暗褐色の粘土質シルト層で、北西部に部分的に認められる。層厚は5cm前後である。耕作により大部分は削られたものと考えられる。堆積時期は不明。

第III層　褐色ないし黄褐色を呈する土壌で、土質は粘土質シルト・シルト質粘土や砂・粘土等多様で、各地点とも細分が可能である。今回の調査区ではこの層の上面で遺構が検出されている。III層の堆積時期は、南東部のIII－1層についてはSI－1竪穴住居跡の出土遺物から古墳時代前期以前と考えられる。

北西部と南東部のIII層を比較すると、南東部はほぼ水平な安定した堆積状況を呈しているのに対し、北東部ではIII－3層以下の各層が西側が下がった不安定な堆積状況を示しており、西側に河川跡の存在が推定される。

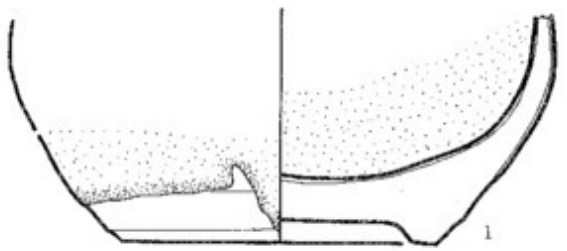
IV. 発見遺構と出土遺物

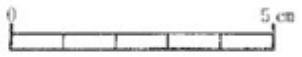
本調査においては、掘立柱建物跡2棟（詳細時期不明）・溝跡7条（詳細時期不明）・竪穴住居跡4棟（古墳時代1棟・奈良時代末又は平安時代初期3棟）・土坑6基（詳細時期不明）その他の遺構1基（詳細時期不明）・ピット34個の各遺構が検出された。掘立柱建物跡は調査区南半部で検出されたが、調査区が狭いためその一部だけを調査した。溝跡はSD－6遺跡以外は浅く幅の狭いものである。竪穴住居跡は古墳時代のものは調査区の南端で、奈良時代末又は平安時代初期のものは調査区の北東部で接近した状況で検出された。土坑は調査区の北部に偏って検出されているピットはSI－1竪穴住居跡の周辺に纏まって分布しているが、住居跡との関係およびそれ自体で建物が建つかどうか明らかにすることは出来なかった。表土中からの出土を含め、各遺構の概要は下記のとおりである。

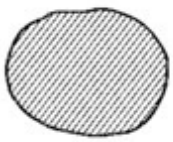
1．表土層の出土遺物

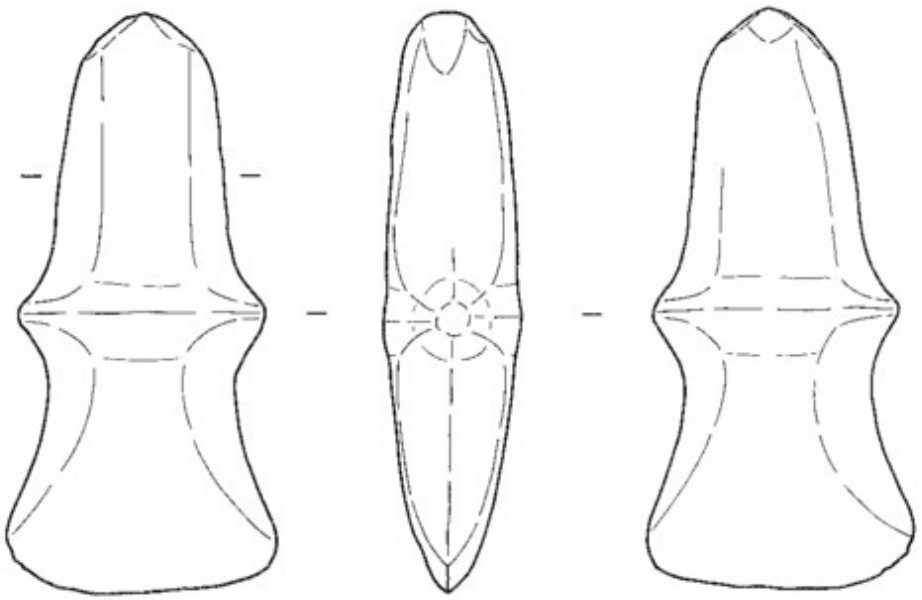
バックホーによって表土排除をしたため、表土層（第I層）からの採集遺物は少ないが、手掘りによる拡張部や、SI－1竪穴住居跡の西側およびSB－2掘立柱建物跡周辺の撹乱部でも遺物は少なかった。

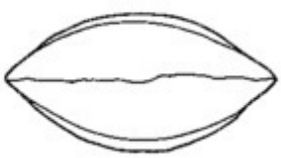
表土層からの出土遺物のほとんどは、摩滅した土師器の細片である。土師器以外には須恵器の小片数点と陶器片1点、石斧1点がある。陶器片は鉢の胴部から底部にかけての破片で、腰部下端が底裏を除き暗オリーブ灰色の釉がかけられている。露胎部も極暗赤褐色の鉄化粧がさ

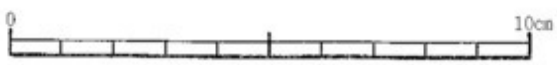










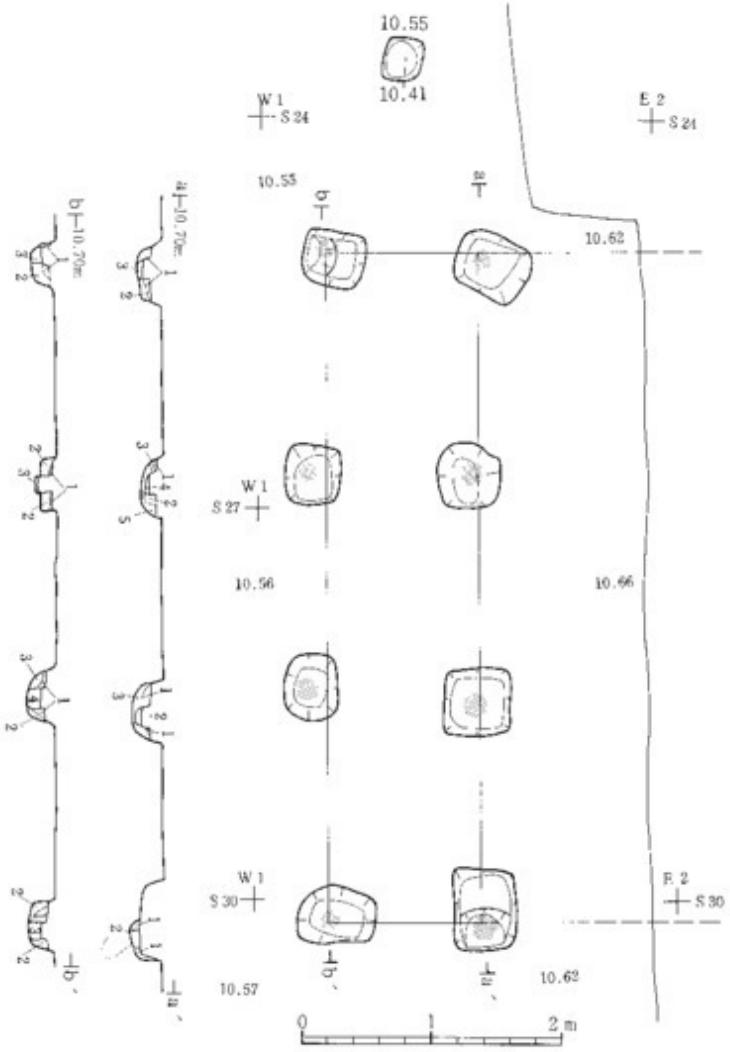


遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量 器高	法量 口径	法量 底径	既存	登録番号	写真図版
1	陶器	鉢?	表土	―	暗オリーブ灰色釉	削り高台	―	暗オリーブ灰色釉		(4.4)	―	6.1		I-1	―
2	石器	有角石器	表土	表面の摩滅が著しい			―	―	―	長さ 11.1	幅 5.2	厚さ 3.7		K-1	39-1

第6図　表土出土遺物実測図

れている。近世のものと考えられる。産地は不明。

石斧はいわゆる有角石斧で、全長11.1cmを計る。全面が風化して荒れている。刃部は緩やかな円刃である。刃部と基部の境の鎬は認められない。斧中央部は両側面側に突出し「角」を形成する。両主面の中央も側面程ではないが、僅かに隆起している。基部は基端に向かって徐々に萎まり、基端は両側面と片方の主面から面取りされてやや尖っている。



第7図　ＳＢ－１掘立柱建物跡実測図

ＳＢ－１　東列

層　No	土　色	土　質	そ　の　他
北　1・1	10Y R3/2黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
2	10Y R5/4にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土をわずかに含む。
3	10Y R3/2黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土をわずかに含む。
北　2・1	10Y R3/2黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色シルトをわずかに含む。
2	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色シルトをわずかに含む。
3	10Y R7/6黄橙色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトを多量に含む。
4	10Y R4/1褐灰色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土を多量に含む。
5	10Y R6/4にぶい黄橙色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土・褐灰色シルト質粘土を含む。
北　3・1	10Y R2/1黒色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトをわずかに含む。
2	10Y R3/3暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
3	10Y R5/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
北　4・1	10Y R3/1黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。
2	10Y R1.7/1黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルトの小ブロックを含む。

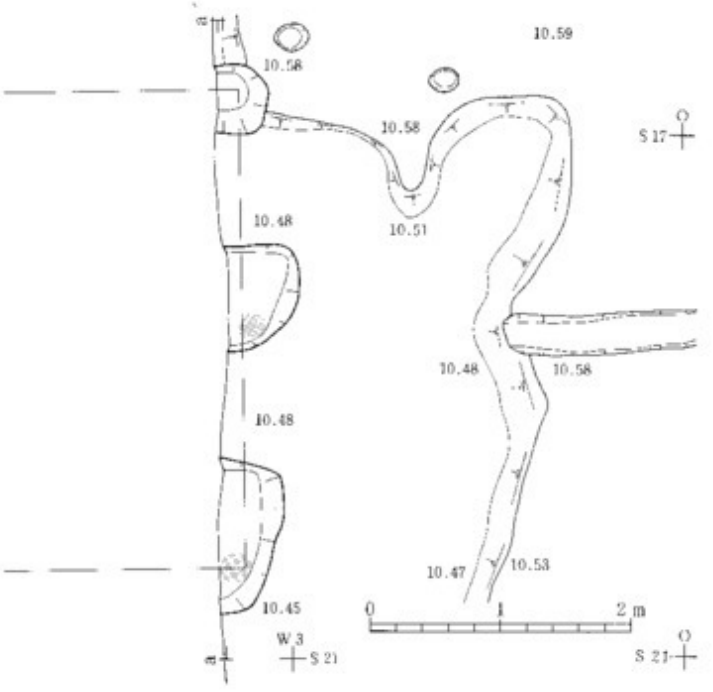
ＳＢ－１　西列

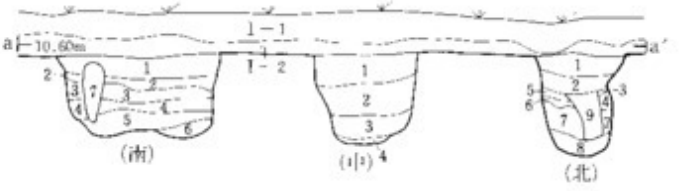
層　No	土　色	土　質	そ　の　他
北－1・1	10Y R2/2黒褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土粒をわずかに含む。
2	10Y R5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトを多量に含む。
3	10Y R4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルトを多量に含む。
北－2・1	10Y R3/2黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土粒を含む。
2	10Y R6/4にぶい黄橙色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
3	10Y R4/6褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルトを含む。
北　3・1	10Y R3/3暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色シルト質粘土粒を含む。
2	10Y R7/3にぶい黄橙色	シ　ル　ト	褐灰色シルトをわずかに含む。
3	10Y R5/6黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色シルト粒をわずかに含む。
4	10Y R4/2灰褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト粒をわずかに含む。
北　4・1	10Y R4/4褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト粒を含む。
2	10Y R5/6黄褐色	シルト質粘土	褐灰色粘土質シルトをわずかに含む。
3	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色シルト粒をわずかに含む。

2．掘立柱建物跡

SB－１掘立柱建物跡

南北３間・東西１間分が検出されたが、東西方向については東側の調査区外にのびるものと考えられ、建物の全体の規模は不明である。南北総長は西列517cm（柱間寸法166～178cm・平均172cm）、東列514cm（柱間寸法165～177cm・平均171cm）を計る。検出部の東西長は118～128cm・





第８図　ＳＢ－２掘立柱建物跡実測図

SB－２

層No.	土色	土質	その他
1－1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	暗褐色土上層
1－2	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	暗褐色土下層
同 1	10YR1/4褐色	シルト質粘土	
2	10YR2/3暗褐色		粘土のブロックを多数とし、褐色のシルト質粘土のブロックを含む。
3	10YR4/4褐色	シルト質粘土	暗褐色土を少量含む。
4	10YR2/3黒褐色		粘土ブロックを多数とし、褐色のシルト質粘土のブロックを含む。
5	10YR4/4褐色	シルト質粘土	暗褐色土を少量含む。
6			黒褐色粘土と褐色シルト質粘土のブロックを等量含む。
7	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	褐色土を斑状に含む。
中 1	10YR1/4褐色	シルト質粘土	
2	10YR1/4褐色	シルト質粘土	暗褐色土を斑状に含む。

層No.	土色	土質	その他
中 3	10YR4/4褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土のブロックを多く含む。
4	10YR5/6にぶい黄褐色	粘質シルト	暗褐色土を少量含む。
北 1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土を斑状のブロック状に含む。
2	10YR5/6にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土を小ブロック状に含む。
3	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	暗黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。
4	10YR5/6明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土をブロック状にわずかに含む。
5	10YR6/6にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトを斑状にわずかに含む。
6	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土質シルトを小ブロック状にわずかに含む。
7	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土を斑状に多数に含む。
8	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土を斑状にわずかに含む。
9	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土を上部に斑状・下部に小ブロック状に含む。

平均123cmである。調査区の東側を拡張しても西より３列目の柱穴が検出できなかったことからすると、２列目と３列目の間隔は１列目と２列目の間隔より広いものと考えられる。西側の柱列の方向はＮ－3°－Ｅである。柱穴は１辺42～63cmの方形乃至長方形を基調とし、確認面からの深さは20cm前後である。柱痕跡は直径14～18cmの円形である。掘り方埋土は黒褐色ないし暗褐色の粘土質シルトまたはシルト質粘土を主体とし、底面寄りにIII層起源と考えられる褐色やにぶい黄褐色土なども見られる。遺物は、西１北２・西２北２・西２南２の柱穴内よりそれぞれ１・２・５点の土師器片が出土している。SI－３竪穴住居跡を西２南１の柱穴が切っている。

SB－２掘立柱建物跡

南北２間の掘立柱建物跡で、東端の柱列だけが調査区の西壁にかかって検出された。柱列の総長は367cm（柱間寸法183～184cm）で、柱列の方向はＮ－1°－Ｗである。柱穴は半分程度しか検出していないので全体は不明であるが、平面形は方形ないし長方形を呈するものと考えられ、南北幅で55～120cm、検出面からの深さは63～77cmを計る。柱痕跡は円形で、直径19～23cmである。掘り方埋土はにぶい黄褐色から黒褐色のシルト質粘土または粘土質シルトを主体とし、黒っぽい土と褐色の土が互層状に埋まっている。また堆積土はブロック状の部分が多い。東１北１より土師器片３点が出土している。

３．溝　跡

SD－１溝跡

SB－１とSB－２の間で検出されたが、西部は耕作による攪乱により削平されている。方向はＮ－89°－Ｅである。幅は上面で31～43cm、底面で20～30cm、深さは５cm前後を計り、断面形は浅い舟底形を呈す。底面は東端より西端が４cm程低い。堆積土は灰黄褐色シルト質粘土１層で、堆積土中より土師器片３点・須恵器片１点が出土している。

SD－２溝跡

SD－１の北側40～50cmのところに、SD－１と平行して検出された。方向はＮ－84°－Ｅである。幅は上面で18～48cm、底面で13～37cm、深さは７～16cmを計り、断面形はＵ形を呈す。底面の高低差はほとんどない。堆積土は上面が黒褐色シルト質粘土層で、下部はにぶい黄褐色から明黄褐色のシルト質粘土層からなるが、いずれも他色土のブロックや細粒を含む。堆積土中より土師器片６点・須恵器片１点が出土している。

SD－３溝跡

SD－２の北側で検出され、西部は耕作による攪乱により削平されている。緩く蛇行するが大体の方向はＮ－85°－Ｅである。幅は上面で27～32cm、底面で20～25cm、深さは３～５cmを計り、

断面形は浅い舟底形を呈す。底面に傾斜は認められない。堆積土はにぶい黄褐色シルト質粘土1層で、出土遺物はない。

SD－4溝跡

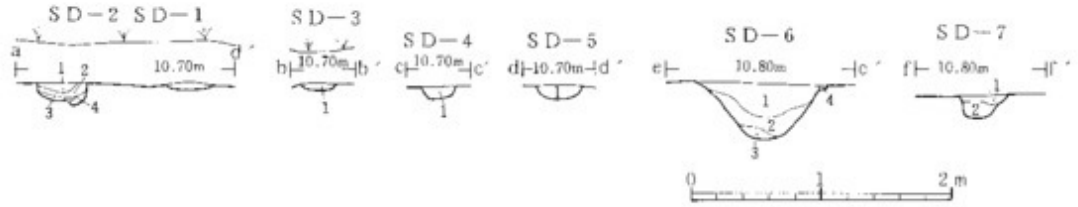
調査区の北東隅で検出された。西端はSI－2竪穴住居跡の煙道により、東端は水道管埋設溝により削平されている。検出部の方向はN－87°－Eである。幅は上面で18～40cm、底面で10～24cm、深さは10cm前後を計り、断面形は逆台形を呈す。堆積土は灰黄褐色土を含む暗褐色シルト質粘土1層で、堆積土中より土師器片1点が出土している。

SD－5溝跡

SI－2竪穴住居跡とSI－3竪穴住居跡の間で検出された。北端は水道管埋設溝に切られ、その先は検出できない。南端は浅くなって立上がる。方向はN－10°－Wである。幅は上面で30～38cm、底面で20cm前後、深さは5～10cmを計る。断面形は舟底状を呈する。堆積土は黒褐色のシルト質粘土層からなる。出土遺物はない。

SD－6溝跡

調査区の北部を横断した状態で検出された。SI－3竪穴住居跡を切っている。やや湾曲してのびているが、大体の方向はN－27°－Eである。上面幅は一定せず52～108cmであるが、底面で20～34cmである。深さは30～40cmで、南端は北端より約10cm低くなっている。断面形は舟底形を呈す。堆積土は大きく見ると3層に分れ、上層から黒褐色シルト質粘土、暗褐色シルト質粘土、褐色シルト質粘土となり、下層程明るくなる。遺物は1層から土師器片28点・須恵器片3点・鉄釉の陶器細片1点が、2層中から土師器片6点が出土している。なお1層出土土師器片



SD－1・2

層 No	土色	土質	その他
SD 1-1	10YR4/2灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土粒を含む。
SD 2-1	10YR2/2黒褐色	シルト質粘土	暗褐色シルト質粘土粒を含む。
2	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土を多量に含む。
3	10YR4/2灰黄褐色	シルト質粘土	黄褐色のシルト質粘土粒を含む。
4	10YR6/6明黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土の小ブロックを含む。

SD－3

層 No	土色	土質	その他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐灰色シルト質粘土の小ブロックを含む。

SD－4

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	灰黄褐色粘土を含む。

SD－5

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/1黒褐色	シルト質粘土	褐色土・灰黄褐色を含む。

SD－6

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	
2	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	
3	10YR4/4褐色	シルト質粘土	黒褐色及び暗褐色土をブロック状に含む。
4	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	

SD－7

層 No	土色	土質	その他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色土粒をわずかに含む。
2	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。

第9図　溝跡断面実測図

のうち12点は、SI－３竪穴住居跡出土遺物№１（第20図・第21図－３）と接合した。

SD－７溝跡

SI－１竪穴住居跡の床面検出作業中に発見されたが、住居跡の断面検討の結果住居跡を切って掘られていることが確認された。西部は浅くなって立上がる。方向はN－85°－Eである。幅は上面で25～36cm、底面で11～25cm、深さは15cm前後を計り、断面形はU字形を呈す。底面に傾きは認められない。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト層で、混合する土壌によって上下２層に分けられる。堆積土中より土師器片１点が出土している。

４．竪穴住居跡

SI－１竪穴住居跡

［平面形・保存状況・重複］西壁の中央付近は、耕作の削平により壁のほとんどが失われ、周溝のみが残っている。平面形は比較的整った方形を呈す。SK－６土坑を切り、SD－７溝跡に切られる。

［規模・方向］煙道を含まない南北軸長は558cm、東西軸長は602cm、面積約33.6m²を計る。方向は、北壁がN－88°－W、東壁がN－2°－Eである。

［堆積土］住居廃絶後の堆積土は５～15cm程残り、カマド及び煙道を含む土層は19層に分けられた。このうち住居内の堆積土の大部分を占めるのは褐色粘土質シルトからなる１～２層である。周溝部分の土層と住居跡の堆積土は区別された。

［壁・床面］南壁は周溝の底面から垂直に立上がるが、東壁・北壁及び西壁の北側は周溝から垂直に立上がった後、上部は傾斜が緩くなり外へ広がっている。床面はほぼ平坦で、カマドの全面から南壁の際の周溝付近まで、幅３m前後の範囲に貼床があり、この範囲とほぼ同一の部分の床面が堅く締まっていた。貼床は暗褐色粘土を含む褐色の粘土質シルトで、カマド前面付近では約２cmの厚さであるが、南壁に寄るに従って厚くなり、南端では７～８cmにもなっている。また貼床下の床面も、貼床範囲よりやや狭い部分が堅く締まっていた。住居内のSK－11・12・13土坑とP．２は貼床除去後の古い床面で検出された。

［柱穴］柱穴は住居の対角線に位置する４本の主柱穴と、壁面に接する14本の支柱穴（壁柱穴）からなる。主柱穴はP．２・８・９・SK－８で、柱間寸法は北辺のP．９～P．２が339cm、南辺のSK－８～P．８が341cm、東辺のP．２～P．８が306cm、西辺のP．９～SK－８が303cmを計り、南北長に対して東西長が30数cm長いが、ほぼ方形を呈す。壁面の南北軸に対して主柱穴の南北軸は４°程東にずれている。各壁面から近くで平行する主柱穴列までの距離は、各面の中央付近で計測すると北面・東面・南面・西面それぞれ130cm・137cm・115cm・117cmを計る。主

柱穴の掘り方は円形ないし不整方形を呈し、長軸68cm・短軸43、深さ58～77cmを計る。掘り方埋土は褐色ないし黄褐色のシルトまたはシルト質粘土で暗褐色のブロックを含んでいる。柱痕跡は円形で、直径は15cm前後である。

支柱穴は壁面を柱穴の直径の半分程抉り込んで掘られ、南壁と北壁には4個、東壁と西壁には3個ある。北壁の4個は、カマドを北壁中央に築くため、中央に柱を配せないことに対応しての配置であり、また南壁の4個はカマドや床面の締まり具合から出入り口との関係による配置と観察される。北辺での柱間寸法はP.10～P.11が70cm、P.11～P.12が203cm、P.12～P.1が136cm。南辺での柱間寸法はP.18～P.5が113cm、P.5～P.17が159cm、P17～P16が174cm。東辺での柱間寸法はP13～P14が197cm、P14～P15が176cm。西辺での柱間寸法はP21～P20が196cm、P20～P19が174cm。各辺とも中ほどでの柱間隔に比して各コーナーまでの間隔は狭く、60～108cmである。支柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、長軸35cm・短軸20cm、床面からの深さ20～30cmを計る。掘り方埋土は暗褐色・褐色・黄褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルトまたはシルト質粘土である。P.1・12・15・19・20・21で直径10cm前後の円形の柱痕跡を確認できた。柱痕跡は、深さ10cm前後の断面での観察によると、ほぼ垂直に立上がっている。なお、周溝部では周溝の堆積土を除去した後に支柱穴の輪郭が検出されている。

［カマド］北壁のほぼ中央に位置し、左右両袖底面の外側間の距離を半分にした点を、北壁に直交させたカマドの中軸は東壁から293cm・西壁から285cmである。残存する両袖外側底面の幅は150cm、内側の幅は45cm前後を計る。カマドの両袖は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色・黄褐色のシルト質粘土又は粘土質シルトで築かれ、左袖は長さ63cm・幅52cm、右袖は長さ66cm・幅48cmの範囲が、床面から13cmの高さまで残存する。カマドの奥壁から43cmから85cmのところまで床面が直径42cm前後の範囲で強く焼けている。焼け面の位置からすると本来の袖の長さは100cm前後あったと推察される。

煙道はカマドの奥壁から13cm離れたところから205cm程の長さで溝状に残っている。先端側が幅広くかつ深くなっており、最大幅は66cm、深さは40cmである。

［周溝］周溝は四壁に沿って巡るが、北壁の中央のカマド構築部分は掘り残されている。幅は30cm前後であるが，南東コーナー付近は幅が広くなり80cm前後をある。深さは12～15cmで、堆積土は暗褐色ないし褐色の粘土質シルトでブロック状の土壌を多く含んでいる。

［その他の施設］住居内からは主柱穴と支柱穴の他に、10個のピットと11基の土坑が検出されている。各遺構はSK－4を除くとカマド前面から南壁までの間は、115cm～150cmの幅を避けるような配置をとっている。通路及び土間との関係によるものであろう。

P.3・4は東の主柱穴間にP.2～91cm～P.3～99cm～P.4～116cm～P.8の間隔で並び、床または間仕切りに関係するものと考えられる。P.22・23は東辺のように柱筋が通っていない

が、東辺のP.3・4に対応する施設の可能性がある。P.26～P.27及びP.7～P.25はカマドの両側に位置することから、カマドの上に棚を作る際のピットの可能性が考えられる。P.6とP.24は住居の対角線にのり、住居の中軸線を挟んで対象の位置にあることから互いに関連ある施設と考えられるが、その機能については不明である。

住居内で検出された土坑は、北壁際（SK－1・10・12）と南壁際（SK－3・4・5・6・7）に位置するものと主柱穴配置の内側に位置するもの（SK－9・11・13）がある。東西両辺の主柱列と東西両壁との間には土坑は掘られていない。主柱穴配置の内側に位置するものも中央部を避けて掘られている。土坑のうち、SK－9・11・12・13については、その堆積土に多量の焼土や炭・灰を含んでおり、カマドの燃料の残り滓を廃棄するために掘られた土坑の可能性が考えられる。これら4基の土坑の掘られた順序としては、カマド脇の貼床下検出のSK－12が古く、続いてSK－12の近くの貼床下で検出され、上部が明黄褐色の粘土質シルトで奇麗に埋められたSK－13。次に貼床下で検出されたが、上部が埋められないまま貼床で覆われたSK－11。最後が貼床を切って掘られたSK－9の順と考えられる。

［住居掘り方］住居の掘り方は第10図のセクション図及びエレベーション図のとおり著しい凹凸があり、深いところでは40cmある。

［出土遺物］土師器・須恵器・鉄製品・石器が出土しているが、堆積土中の遺物が多く、床面の遺物は少ない。第12図1は1層出土の土師器坏で、内面はヘラミガキ後黒色処理されている。外面は摩滅しロクロ痕跡は認められないが、ロクロを使用している可能性もある。2はSK－3から出土した双耳坏と考えられる非ロクロ土師器で、内外面ともヘラミガキ調整される。3～8は須恵器坏で、いずれも比較的広い底部から直線的に外傾して口縁部に至る。底部の状態を見ると、回転ヘラ切り後ロクロナデ調整されるもの（3－1層出土、6－床面出土）と、回転ヘラ切り無調整のもの（7－床面出土、8－P2掘り方出土）、及び切り離し後手持ちヘラケズリされるもの（4－1層出土）、切り離し後ロクロナデ調整されるもの（5－2層下部出土）がある。9は1層出土の須恵器の蓋で、端部は丸くなっている。10はSK－3・5・7土坑から出土した破片が接合した非ロクロ土師器の鉢で、器面の保存状態は良いが、歪みが著し

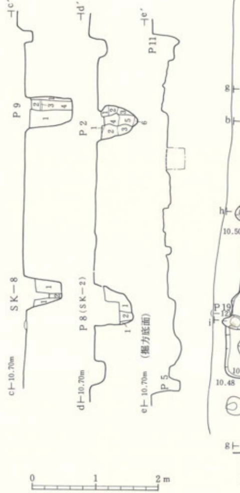
SI－1　堆積土

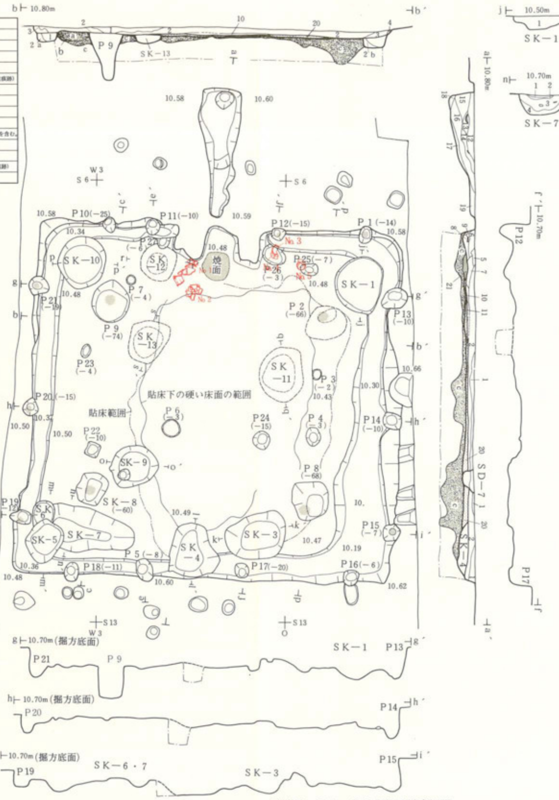
層No.	土色	土質	その他
1	10YR4/4褐色	軟土質シルト	5層褐色粘土ブロックを含む。
2	10YR4/6褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトを多く含む。
3	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルト粒・ブロックを含む。
4	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルト粒を含む。
5	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土質シルトをブロック状に含む。
6	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄色・シルト質粘土質・炭褐色粒を多く含む。
7	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土粒・炭のブロックを多く含む。
8	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルト粒・炭褐色粒を多く含む。
9	10YR5/4にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭褐色シルト質粒を少しまばらに含む。
10	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルト粒・炭褐色粒を含む。
11	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルト粒・炭褐色粒を少しまばらに含む。
12	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	炭褐色粘土質シルト粒を多く含む。
13	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	炭褐色粘土質シルト下部にやや多く含む。
14	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	5層褐色粘土質シルトを中量・暗褐色粘土質シルトを少量含む。

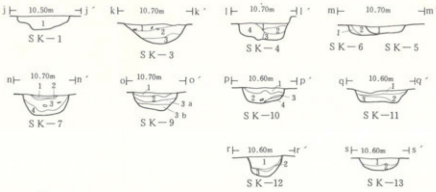
層No.	土色	土質	その他
15	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	5層褐色粘土質シルト・炭ブロックを含む。
16	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	黄色粘土の小ブロックを多く含む。炭褐色粒を少し含む。
17	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土のブロックをまばらに含む。
18	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土の小ブロックを含む。
19	10YR3/4暗　色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトをブロック含む。
20	10YR3/3暗　色	粘土質シルト	5層（床面）褐色粘土を含み軟くしまる。
21	10YR3/3暗褐色	礫　　土	（カマド焼面）赤褐色粘土のブロックを含む。
22A	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色土粒を少量含む。
22B	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックと炭化・焼土粒。
23	10YR3/4暗　色	粘土質シルト	褐色土粒を多く含む。
貼床A	10YR3/4暗　色	粘土質シルト	炭化・焼土粒・褐色土ブロックを含む。
5	10YR3/3褐色	シルト質粘土	炭化土粒を含む。
7	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックをまばらに含む。

SI－1　柱穴

層 No	土色	土質	その他
SK-8・1	10YR4/4褐　色	シルト	暗褐色土の小ブロックを少量含む。
2	10YR4/6褐　色	シルト	(柱痕跡)
Pit－9・1	10YR5/6黄褐色	シルト	暗褐色土のブロックを層上部程多く含む。
2	10YR3/4暗褐色	シルト	
3	10YR4/2灰黄褐色	粘土	(柱痕跡)
4	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	灰褐色土の少ブロックをまばらに含む。
Pit－8・1	10YR4/4褐　色	粘土	暗褐色土のブロックを多く含む。
2	10YR3/3暗褐色	シルト	(柱痕跡)
Pit－2・1	10YR4/6褐　色	シルト質粘土	暗褐色土粒を少量含む。
2	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土・暗褐色土・焼土のブロックを含む。
3	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	暗褐色土の大きなブロックを含む。
4	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物粒を含む。
5	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	焼土・暗褐色土粒・炭化物を含む。(柱痕跡)
6	10YR4/2灰黄褐色土	粘土	







SI－1・SK－1

層 No	土色	土質	その他
1	10YR6/8明黄褐色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土粒をまばらに赤褐色焼土粒をわずかに含む。

SI－1・SK－3

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土質シルト粒及び明黄褐色焼土を含む。
2	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄橙色粘土質シルトのブロックを含む。
3	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土のブロックをわずかに含む。

SI－1・SK－4

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルト粒をまばらに、灰黄褐色シルト質粘土を多量に含む。
2	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト質粘土を多量に含む。
3	10YR5/8黄褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土質シルトを全体的に多量に含む。
4	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト質粘土のブロックを多量に黒褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。

SI－1・SK－5・6

層 No	土色	土質	その他
SK-5・1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色シルト質粘土のブロックを多量に含む。
SK-6・1	10YR3/4暗褐色	シルト	
2	10YR4/6褐　色	シルト	

SI－1・SK－7

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/4暗褐色	シルト	炭化物粒を含む。
2	10YR4/6褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを含む。
3	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	土器・小石を含む。黄褐色土・焼土炭を多く含む。
4	10YR4/6褐　色	シルト質粘土	暗褐色土をまばらに含む。

SI－1・SK－9

層 No	土色	土質	その他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
2	10YR6/6明黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルト粒をわずかに含む。
3 a	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色粘土質シルト粒を含む。
3 b	10YR2/1黒　色	灰（炭から）	明黄褐色シルト質粘土粒をわずかに含む。

SI－1・SK－10

層 No	土色	土質	その他
1	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土の小ブロックをまばらに含む。
2	10YR4/4褐　色	粘土質シルト	黄褐色シルト質粘土と灰黄褐色シルト質粘土を粒状に含む。
3	10YR4/4褐　色	シルト質粘土	赤褐色焼土の小ブロックを含む。
4	10YR4/6褐　色	シルト質粘土	灰黄褐色シルト質粘土を粒状にまばらに含む。

SI－1・SK－11

層 No	土色	土質	その他
1	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土・赤褐色焼土を多量に含む。明黄褐色土粒を多量に含む。
2	10YR6/6明黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色焼土・赤褐色焼土を多量に含む。明黄褐色土の小ブロックを含む。

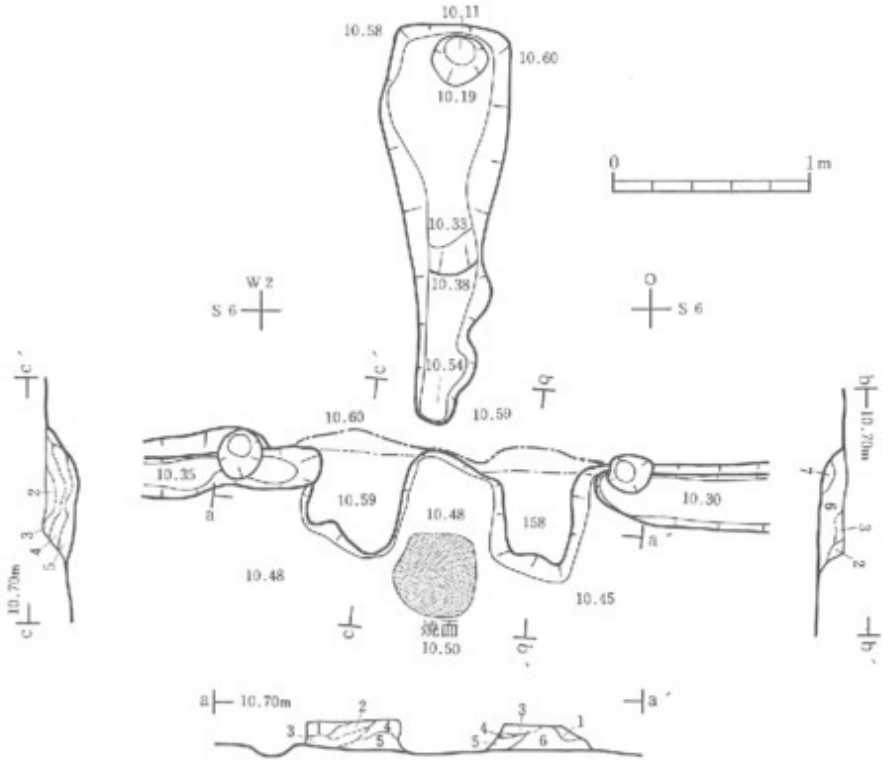
SI－1・SK－12

層 No	土色	土質	その他
1	10YR5/6黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土を粒状及びブロック状にわずかに含む。
2	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	焼土のブロックを多量に含む。
3	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒をわずかに含む。

SI－1・SK－13

層 No	土色	土質	その他
1	10YR6/6明黄褐色	粘土質シルト	
2	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	赤褐色及び黒色の焼土を粒状に多量に含む。

第10図　SI－1竪穴住居跡実測図



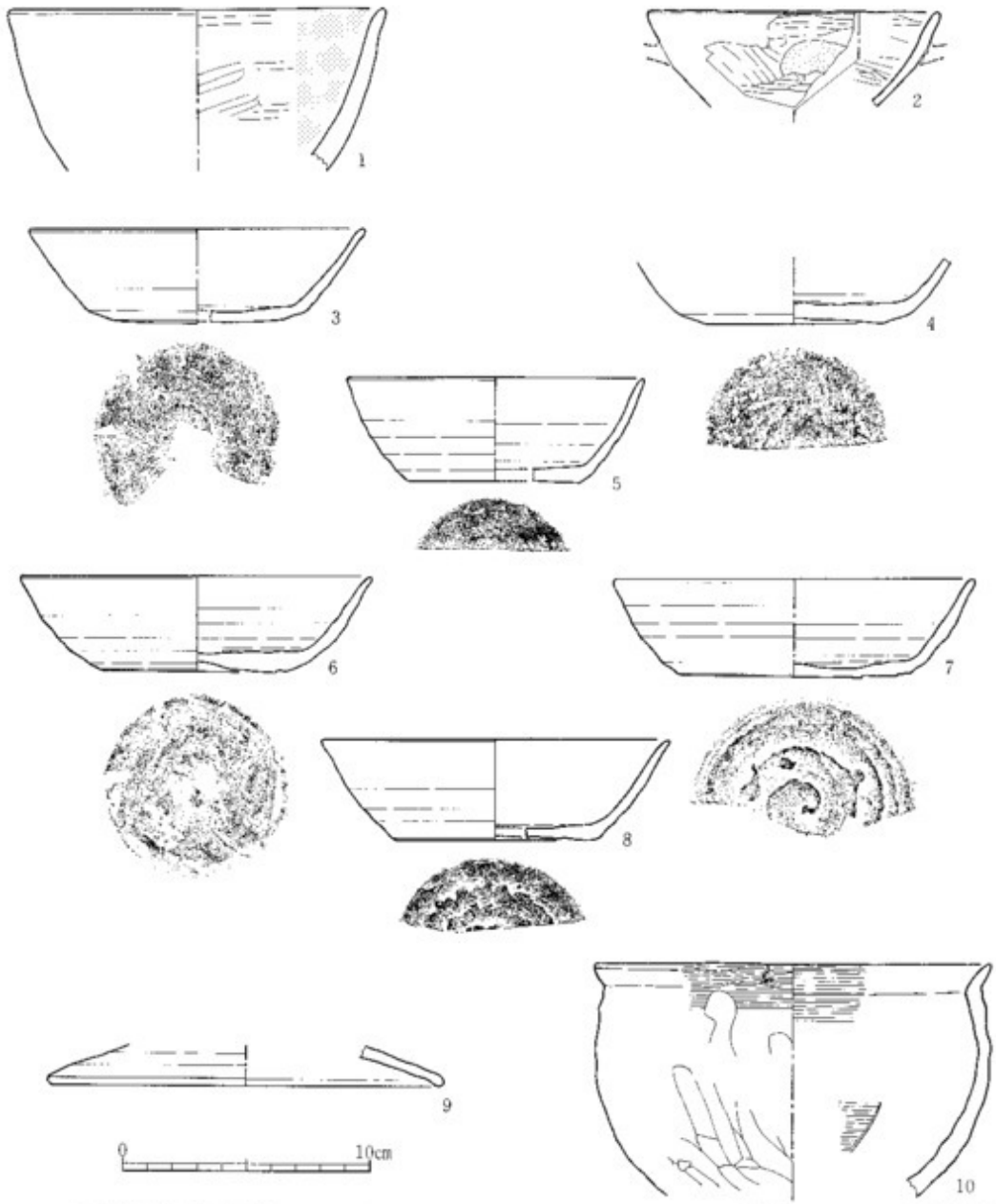
層 No	土色	土質	その他
左袖1	10YR4/4褐色	シルト質粘土	焼土粒・暗褐色土のブロックを少量含む。
2	10YR4/6褐色	シルト質粘土	
3	10YR4/4褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを含む。
4	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	暗赤褐色焼土のブロックを含む。
5	10YR5/6黄褐色	砂土質シルト	

層 No	土色	土質	その他
右袖1	10YR4/6褐色	砂土質シルト	暗褐色土のブロックを少量含む。
2	10YR4/4褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを少量含む。
3	10YR5/4にぶい黄褐色	砂土質シルト	
4	10YR3/3暗褐色	砂土質シルト	赤褐色焼土粒をわずかに含む。
5	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	
6	10YR4/6褐色	砂土質シルト	
7	10YR5/4にぶい黄褐色	砂土質シルト	暗褐色焼土粒を少量含む。

第11図　ＳＩ－１竪穴住居跡カマド実測図

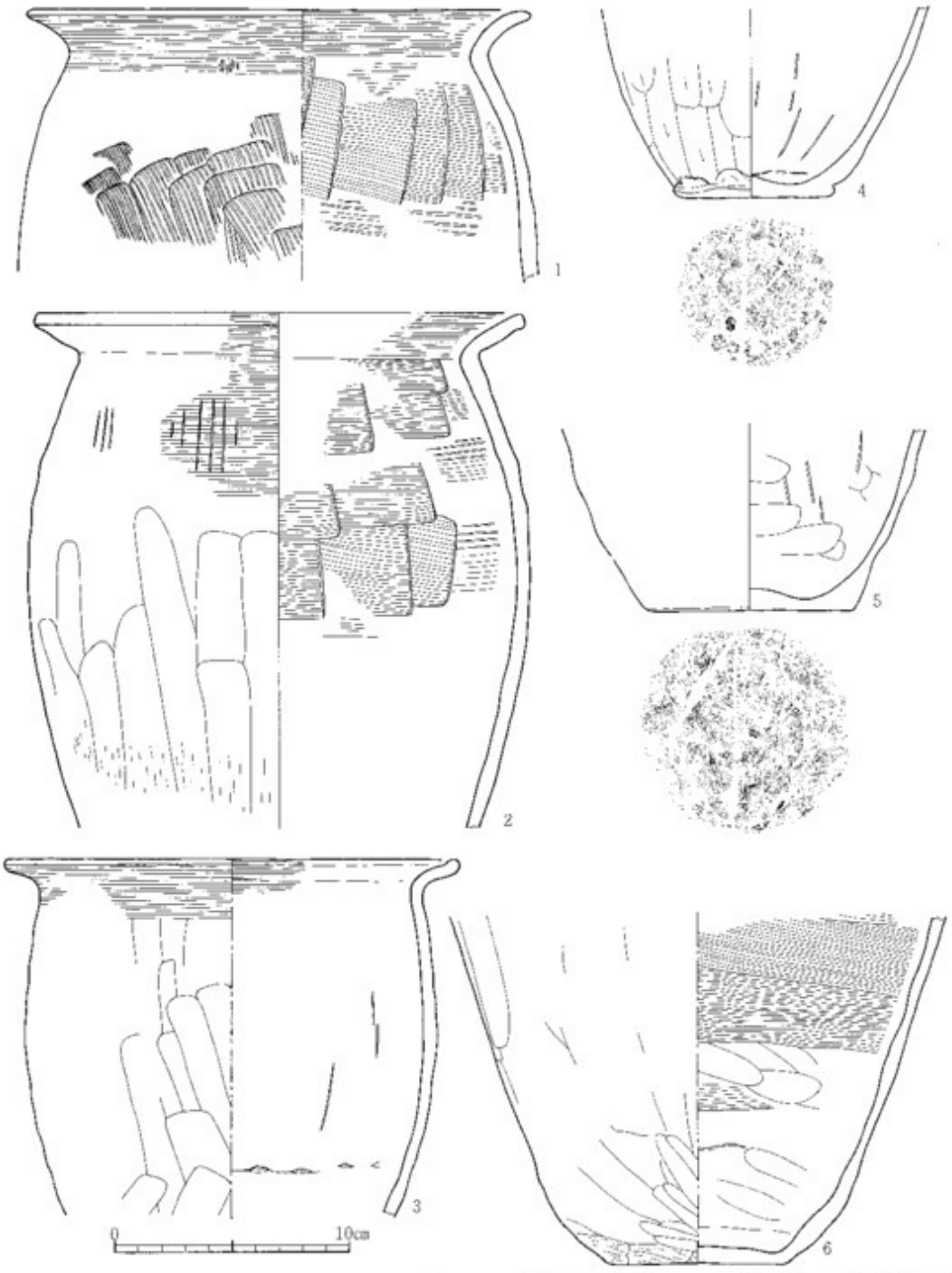
い。口縁はヨコナデ、体部は外面がナデ、内面がヘラナデ調整される。

第13図は非ロクロ土師器の甕で、カマド近くの２層と床面から出土している。１～３は体部から口縁にかけての破片で、いずれも体部の上半に張りをもつ。１は２層から出土し、口縁部が外反しその端部が丸くなっている。調整は口縁はヨコナデ、体部は外面がヘラナデ状のハケメ、内面がヘラナデによる。２も２層から出土し、口縁部が外傾しその端部は平らになっている。調整は口縁はヨコナデ、体部は外面上半は平行タタキ後ヨコナデ、下半がヘラナデ、内面がヘラナデによる。３も２層から出土し、口縁部が外反し、さらに端部が上方に立つ。調整は口縁はヨコナデ、体部は外面がヘラナデ、内面がヘラナデによる。４～６は体部下半から底部にかけての破片で、調整は外面がヘラナデまたはナデ、内面はヘラナデによる。２層出土の４・５の底面には木葉痕が認められる。床面出土の６は体部下端がヘラケズリ、底面はナデ調整。



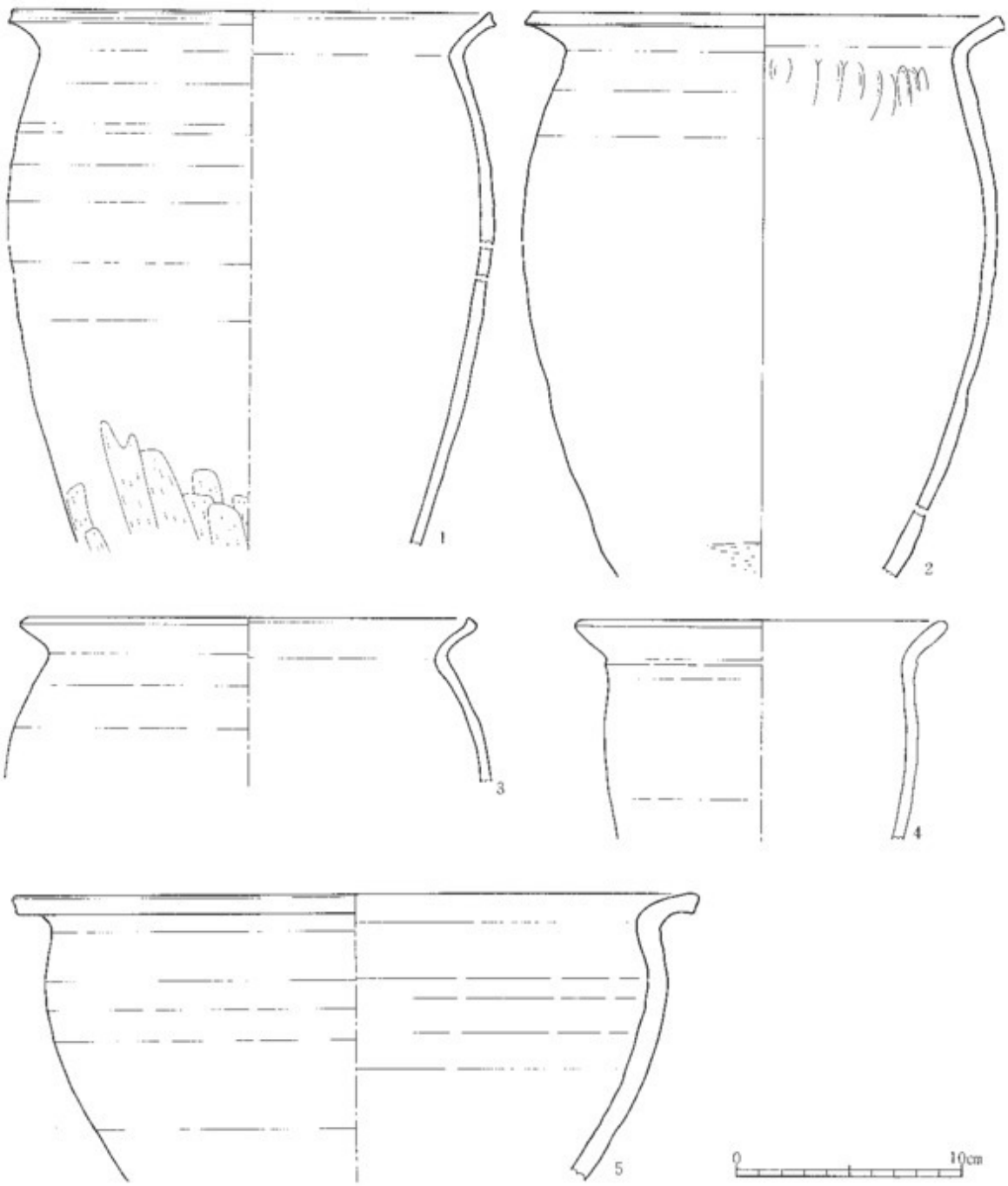
遺物No	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量 器高	法量 口径	法量 底径	残存	登録番号	写真図版
1	土師器	坏	1 層	?	?	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	−	−	15.2	-		C 1	34－1
2	土師器	双耳坏	S K － 3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	−	−	11.8	−	1/10	C－2	34－2
3	須恵器	坏	1 層	ロ ク ロ	ロ ク ロ	回転ヘラ切り後ロクロナデ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	3.8	13.5	6.9	2/3	E－3	37－3
4	須恵器	坏	1 層	−	ロ ク ロ	ナデ持ちヘラ削り	−	ロ ク ロ	ロ ク ロ	−	−	7.0		E－2	37－2
5	須恵器	坏	2 層下部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロクロナデ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	4.2	12.0	6.9	1/3	E－5	−
6	須恵器	坏	床面(No 5)	ロ ク ロ	ロ ク ロ	回転ヘラ切り後ロクロナデ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	3.9	14.2	7.4	完形	E 6	37－5
7	須恵器	坏	床面(No 4)	ロ ク ロ	ロ ク ロ	回転ヘラ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	3.9	14.6	9.3	1/2	E－7	37－6
8	須恵器	坏	P 2 掘方	ロ ク ロ	ロ ク ロ	回転ヘラ切り	ロ ク ロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	4.1	14.0	8.0	1/2	E－8	38－1
9	須恵器	蓋	1 層	頂部 ロ ク ロ	端部 ロ ク ロ	上部 −	裏部 ロ ク ロ	縁部 ロ ク ロ	上部 −	−	復径 16.0	ﾂﾏﾐ痕	1/10	E－1	37－1
10	土師器	鉢	S K3・5・7	ヨコナデ	ナ デ	−	ヨコナデ	ヘラナデ		−	16.0	−	1/6	C－3	34－3

第12図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物実測図（１）



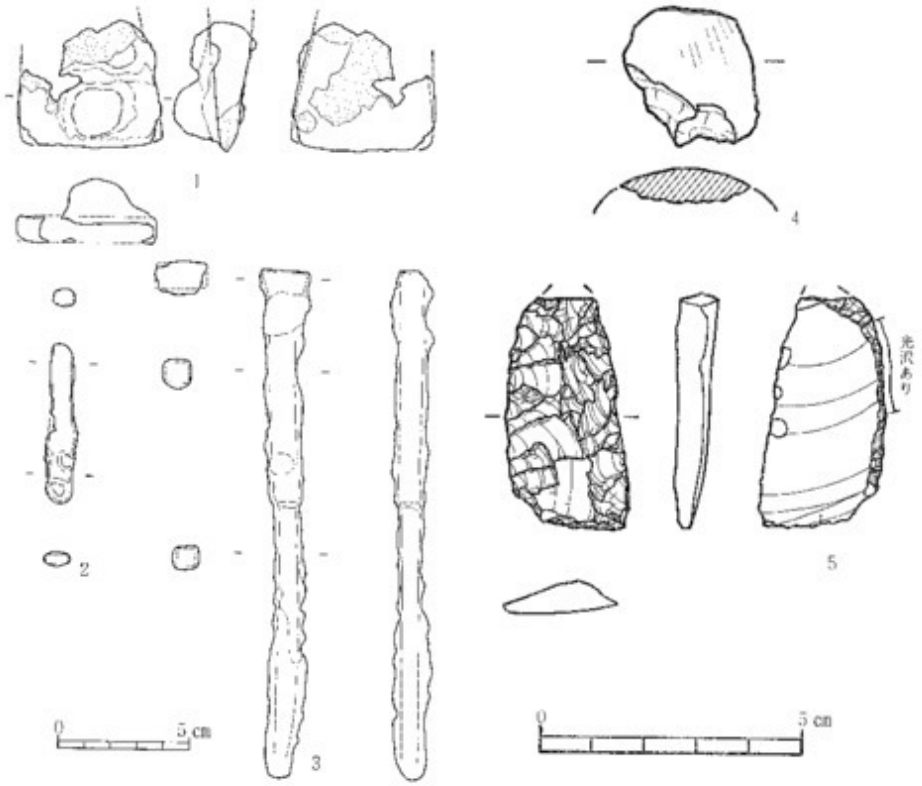
遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	口径	底径	器高	残存	登録番号	写真図版
1	土師器	甕	2層下部No1	ヨコナデ	ハケメ	-	ヨコナデ	ヘラナデ		-	21.3	-	1/4	C-12	35-3
2	土師器	甕	2層下部No1・2	ヨコナデ	肩部ヨコナデ ヘラナデ	-	ヨコナデ	ヘラナデ		-	20.7		1/2	C-15	36-6
3	土師器	甕	2層下部No1・2	ヨコナデ	ヘラナデ	-	ヨコナデ	ヘラナデ		-	19.4			C-14	35-5
4	土師器	鉢	2層下部No2	-	ヘラナデ	本葉痕	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	6.8		C-11	35-2
5	土師器	鉢	2層	-	ナデ	木葉痕	-	ヘラナデ	ナデ	-	-	8.7		C-10	35-1
6	土師器	鉢	床面	-	ナデ 下段ヘラケズリ	ナデ		ヘラナデ	ナデ	-	-	7.4		C-13	35-4

第13図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物実測図（２）



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量 頸高	法量 口径	法量 底部	残存	分類番号	写真図版
1	土師器	壺	2層下部	ロクロ	ロクロ 下端ヘラケズリ	—	ロクロ	ロクロ			21.1	·	1/5	D－1	36－1
2	土師器	壺	整理13・14層	ロクロ	ロクロ 下端ヘラケズリ	—	ロクロ	ナデ	—	—	20.5	—	1/2	D－2	36－2
3	土師器	甕	SK－3	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	·	—	19.5		1/4	D－4	36－4
4	土師器	甕	SK-9・3層	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	—	16.6		1/8	D－3	36－3
5	須恵器	甕	1層	ロクロ	ロクロ	—	ロクロ	ロクロ	—	—	30.3	—	1/8	E－4	37－4

第14図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物実測図（３）



遺物No.	種別	器種	層位	全長	最大幅	厚さ	備考	登録番号	写真図版
1	鉄製品	?	周溝	(5.0)	5.5	(1.6)	斧身の刃部片?	N－2	38－7
2	鉄製品	?	1層	6.1	1.0	0.4		N－1	38－6
3	鉄製品	?	P8横方	19.5	1.9	1.2	中央に四面とも段差有り	N－3	38－8
4	石器	石斧片?	1層	(2.6)	(2.6)	(0.7)	砂岩製	K－2	39－2
5	石器	石匙	1層	(4.4)	2.3	0.7	つまみ部欠損・蛇紋岩製	K－3	39－3

第15図　ＳＩ－１竪穴住居跡出土遺物実測図(4)

第14図１～４はロクロ土師器の甕である。大形（１～３）と小形（４）の器種がある。大形のものは体部上半に張りをもつ。１は２層から出土し、口縁の端が広く平らになっており、体部下半は縦位のヘラケズリ調整がなされる。２は煙道の堆積土より出土したものであるが、１に類似したプロポーションをもつ。部下半に横位のヘラケズリ調整がなされる。３はSK－３から出土し、口縁部が外反し、さらに端部が上方に立つ。４は口縁と体部との境に軽い段をもち、外反した口縁の端部は肥厚する。５は須恵器の甕で強く外反した口縁部に最大径をもつ。内外面ともロクロ調整される。

鉄製品は３点出土している。第15図１は周溝から出土した板状の製品で、片端面が斧の刃先のように尖っている。ただ現状の断面は中空となっているので、斧とは別の用途の製品の可能性が強い。２は１層から出土した棒状の鉄製品で、断面は長方形である。３は主柱穴Ｐ８の掘り方から出土した。断面四角形の棒状の製品であるが、中央に４面とも段がついて片側がやや

細くなる。太い側の端部は少し八の字に広がる。

石製品は1層から2点出土している。第15図4は石斧の破片で、表面に擦痕が観察される。5は石匙であるが、つまみの部分が折れている。

SI－2竪穴住居跡

［平面形・保存状況・重複］ 西壁と南壁西端は耕作の削平により壁のほとんどが失われている。平面形は方形を呈す。SD－4溝跡を切る。

［規模・方向］ 煙道を含まない南北軸長は442cm、東西軸長は440cm、面積約19.4㎡を計る。方向は、南壁がN－89°－W、東壁がN－2°－Eである。

［堆積土］ 堆積土は2～10cm程残り、カマド及び煙道を含む土層は15層に分けられた。このうち住居内の堆積土の大部分を占めるのは、にぶい黄褐色の粘土質シルトの1層と、黄褐色の粘土質シルトの2層である。

［壁・床面］ 残っている壁は床面から急に立上がる。周溝のある北壁と東壁及び西壁の北端は周溝と壁との間が狭いテラス状になっている。床面はほぼ平坦で、カマドの前面から南壁の近くまで、幅115cm～170cmの範囲が堅く締まっていた。

［柱穴］ 柱穴は住居の北寄りに東西に並ぶSK－2とP.11の2本の主柱穴と、各壁面に2本づつある8本の支柱穴(壁柱穴)からなる。主柱穴のSK－2とP.11の柱間寸法は199cmを計る。主柱穴列から北壁面までの距離は155cm、南壁までの距離は280cmで住居の南北長の3分の1強の所に位置する。SK－2から西壁までは130cm、P.11から東壁までは118cmを計る。主柱穴の掘り方は円形ないし不整円形を呈し、長軸55cm・短軸38cm、深さ35～37cmを計る。掘り方埋土は黒褐色・暗褐色・褐色の粘土質シルトまたはシルト質粘土でブロック状の土壌を含んでいる。柱痕跡は明らかでなかった。

支柱穴は壁面を柱穴の直径の半分程抉り込んで掘られ、各壁にそれぞれ2箇所ずつある。各

SI－2

図No.	土色	土質	土層の特徴
1	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを微量に含む。
2	10YR3/4黒褐色	粘土質シルト	暗褐色土質シルトをブロック状に含む。
3	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘質シルトを微量に含む。
4	10YR4/6褐色	粘土質シルト	暗褐色シルト質粘土をブロック状に含む。
5	10YR4/4褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土を多量に含む。
6	10YR5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトを多量に含む。
7	10YR4/6褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む。
8	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。
9	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土の小ブロックを含む。
10	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色の粘土質シルトの小ブロックを含む。
11	10YR4/4褐色	シルト質粘土	黄褐色シルト質粘土を斑状に含む。
12	10YR4/6褐色	粘土質シルト	黄褐色の粘土質土を斑状に含む。
13	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを斑状に含む。
14	10YR4/4褐色	粘土質シルト	黄褐色シルト質粘土を斑状に少量含む。
15	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土質シルトを斑状に全体に含む。
9	10YR5/6黄褐色	シルト質粘土	(壁方ボケ) にぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを含む。

SI－2・SK－1

図No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルト多量に含む。焼土の小ブロックを少量含む。

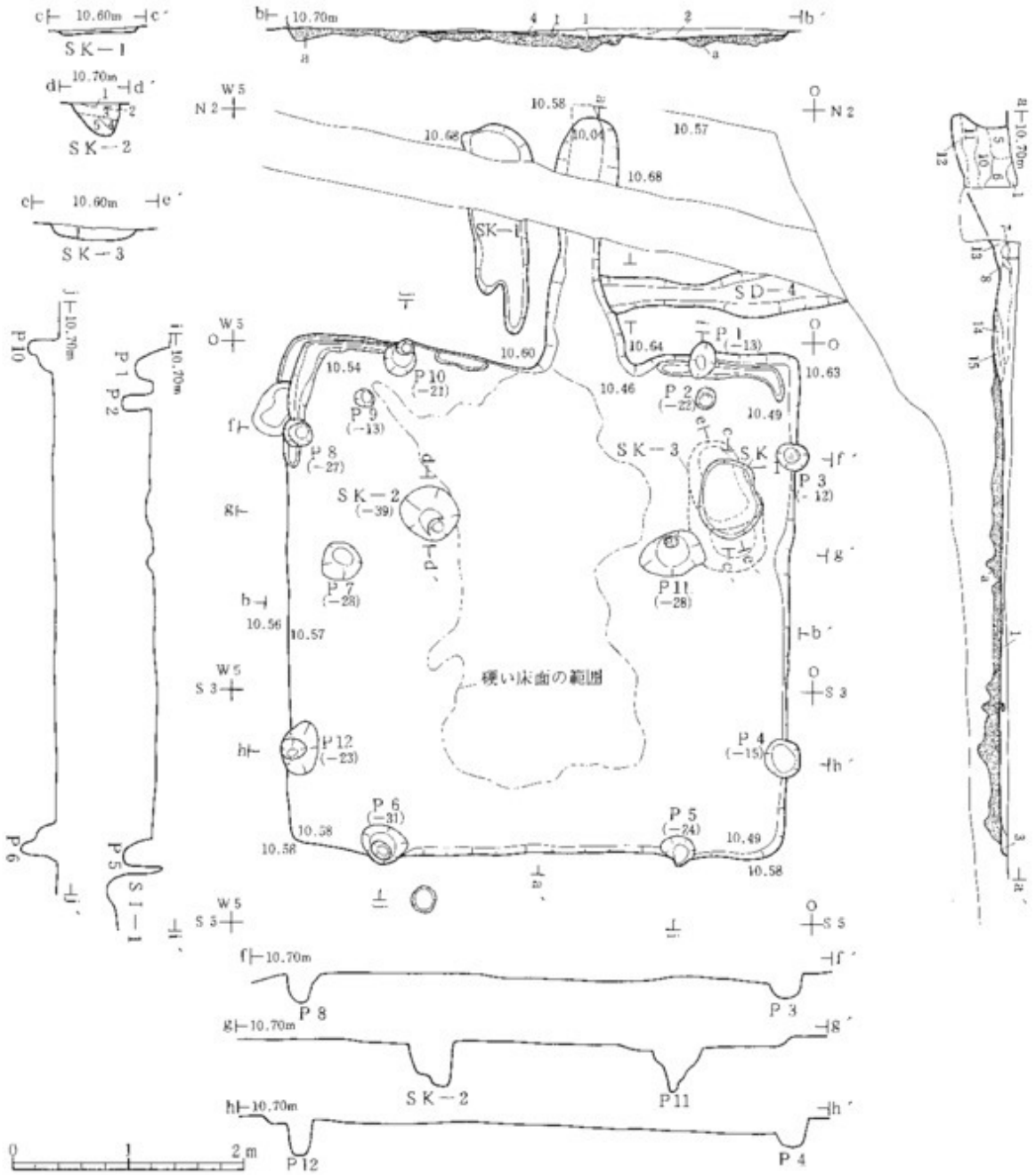
SI－2・SK－2(柱穴)

図No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR4/4褐 色	シルト質粘土	
3	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色シルト質粘土の小ブロックを少量含む。
4	10YR4/6褐 色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトを少量に含む。
5	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色土をブロック状に含む。

SI－2・SK－3

図No.	土色	土質	その他
1	10YR4/6褐 色	シルト質粘土	炭化・焼土粒・暗褐色土をわずかに含む。

壁の支柱穴は、各辺を３等分する位置ではなく、住居の各コーナーに寄っている。各壁の支柱穴の柱間寸法は、北壁が254cm、南壁が257cm、東壁が261cm、西壁が276cmで、支柱穴からコーナーまでの距離は86～100cmである。支柱穴の掘り方は円形ないし楕円形を呈し、長軸45cm・短軸22cm、床面からの深さ13～29cmを計る。掘り方埋土は黒褐色・暗褐色・褐色の粘土質シルトまたはシルト質粘土である。Ｐ．３で直径10cmの円形の柱痕跡を確認できた。



第16図　ＳＩ－２竪穴住居跡実測図

この住居の主柱穴が２つであることからすると、南壁の支柱穴は主柱穴を補足する役割をはたしていたことも考えられる。

［カマド］北壁の中央より東に寄った所に位置するが、煙道が残るだけで両袖は残っていない。煙道の中軸は東壁から194cm・西壁から248cmである。カマド部の床面で焼面は確認できなかった。煙道はカマドの北壁から206cm程の長さで溝状に残っている。幅は34～54cmで先端が深くなっており、深さは48cmを計る。

［周溝］周溝は北壁と東西両壁の北端部に存在し、北壁のカマド部分は掘り残されている。幅は９～19cm、深さは５cm前後である。堆積土は黄褐色の粘土質シルトからなる。

［その他の施設］住居内からは主柱穴と支柱穴の他に３個のピットと２基の土坑が検出されている。ただし，SK－３については、住居の掘り方埋土の除去後に検出されたものなので、住居と直接関係はないと考えられる。SK－１は長軸68cm、短軸55cmの楕円形の土坑で、深さは４cmと浅く、堆積土は黒褐色土１層からなる。

［住居掘り方］住居の掘り方は第16図のセクション図のとおり凹凸があり、深さは５～10cmである。

［出土遺物］SI－２住居跡は堆積土から土師器片数十点・須恵器片十数点、および床面検出遺構内から土師器片数点が出土しているが、床面からの出土遺物はない。図化した遺物は堆積土から出土した須恵器が２点ある。１点は糸切り底の底部から体部にかけての坏片、他はヘラ切りの後回転ヘラケズリされた坏の底部片である。

遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量 高台	法量 口径	法量 底径	残存	登録番号	写真図版
1	須恵器	坏	1～2	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	3.4	13.7	7.3	1/8	E－9	38－2
2	須恵器	坏	SK－2		ロクロ	回転ヘラ切り後ロクロ		ロクロ	ロクロ			8.7		E－10	

第17図　ＳＩ－２竪穴住居跡出土遺物実測図

SI－３竪穴住居跡

［平面形・保存状況・重複］調査区の南部で住居の西半部が検出された。東半分は調査区外となっている。検出部は耕作により削平を受け、壁は残っていない。平面形は方形を呈するものと考えられる。SB－１掘立柱建物に切られている。

［規模・方向］南北長は334cm、検出部の東西長は176cmを計る。方向は、東壁でＮ－4°－Ｅで

ある。

［堆積土］堆積土は、調査区東壁付近で５～10cm程度残っているが、西寄りは耕作による撹乱のためほとんど残っておらない。東壁寄りの堆積土は暗褐色の粘土質シルトからなり、含有物によって２層に分けられた。西寄りの堆積土は２層のみである。

［壁・床面］壁は削平によって残存しない。確認された床面の範囲が住居の範囲を示すものかどうか明らかではなく、若干広がっていた可能性もある。

［柱穴］調査範囲内の床面で３個のピットが検出されたが、柱痕跡を確認できたものはなく柱穴かどうかは不明である。

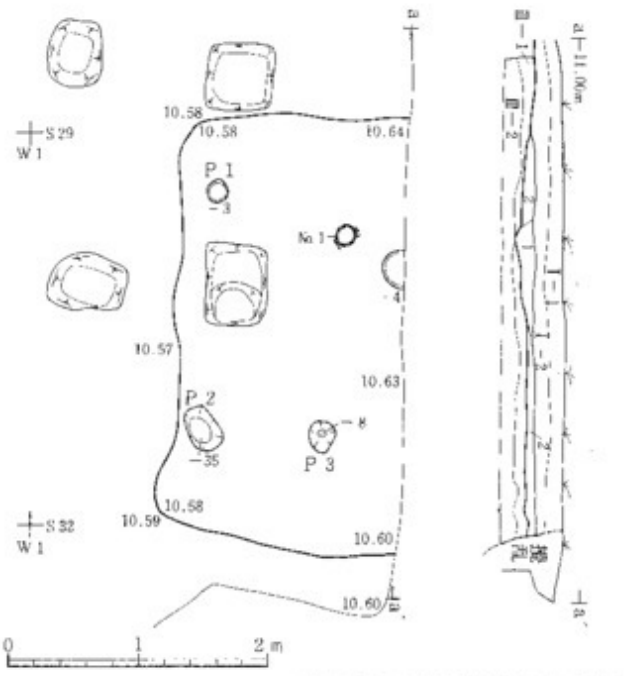
［カマド・炉］調査範囲内では、カマドおよび炉跡とも検出されなかった。

［周溝］調査範囲内に周溝はない。

［その他の施設］３個のピット以外に土坑その他の施設はない。

［住居掘り方］調査区の東壁直下にトレンチを入れて床面下の土層観察を行なったが、掘り方の埋土を認めることはできなかった。

［出土遺物］２層と床面から土師器が出土している。第19図１～３は２層から出土の土師器で、体部は球形を呈する。外面は口縁部ヨコナデ、体部ハケメ調整される。内面は口縁部がハケメ調整だけのものとハケメ後ヨコナデ調整されるものなどがある。体部の内面調整はヘラナデによるようである。４は床面に正立した状態で出土した土師器の壺で、やや偏平な球形の体部に外反する口縁が付く。内外面ともヘラミガキ調整される。

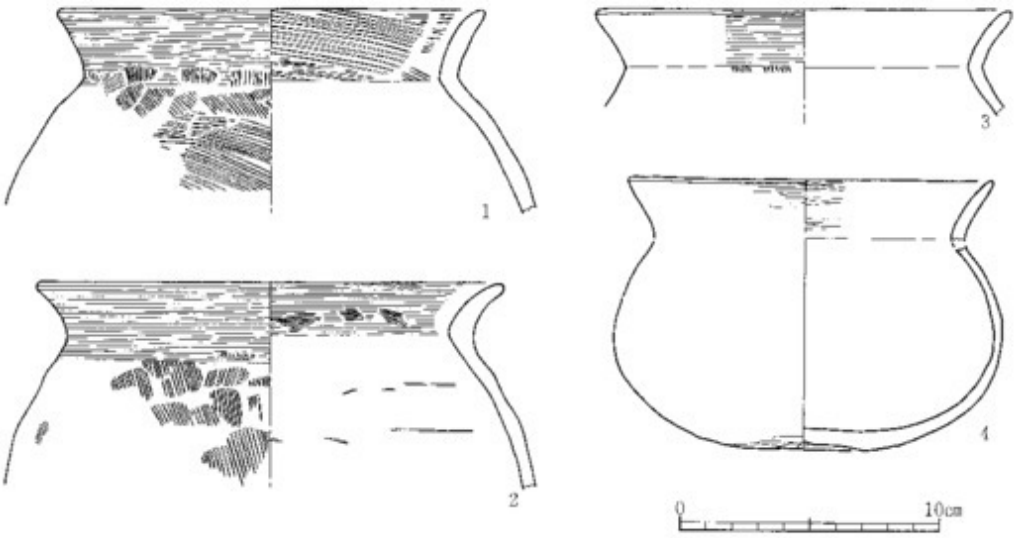


層 No	土　色	土　質	そ　の　他
1 - 1	10Y R3/2黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含む。耕作土。
1 - 2	10Y R4/3灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含む。旧耕作土。
1	10Y R3/3暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルトのブロックと黒褐色シルト質粘土のブロックを含む。
2	10Y R3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトのブロックを多量に含む。
3 - 1	10Y R5/6黄褐色	粘土質シルト	褐灰色シルト質粘土粒を含む。
3 - 2	10Y R4/6褐　色	粘土質シルト	褐灰色シルト質粘土の小ブロックを含む。

第18図　ＳＩ－３竪穴住居跡実測図

SI－４竪穴住居跡

［平面形・保存状況・重複］調査区の北部で住居の北東コーナー付近と煙道の一部が検出さ



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底面	法量 器高	法量 口径	法量 底径	残存	登録番号	写真図版
1	土師器	壺	2	ヨコナデ	ハケメ	－	ハケメ	ヘラナデ？	－	－	16.5		1/4	C－6	34－6
2	土師器	壺	2	ヨコナデ	ハケメ		ヨコナデ	ヘラナデ？	－		18.0	－	1/4	C 7	34－7
3	土師器	壺	2	ヨコナデ	ハケメ	－	？	？		－	16.0	－	1/8	C－5	34－5
4	土師器	壺	床面No.1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ？		(10.4)	14.0	4.8		C－4	34－4

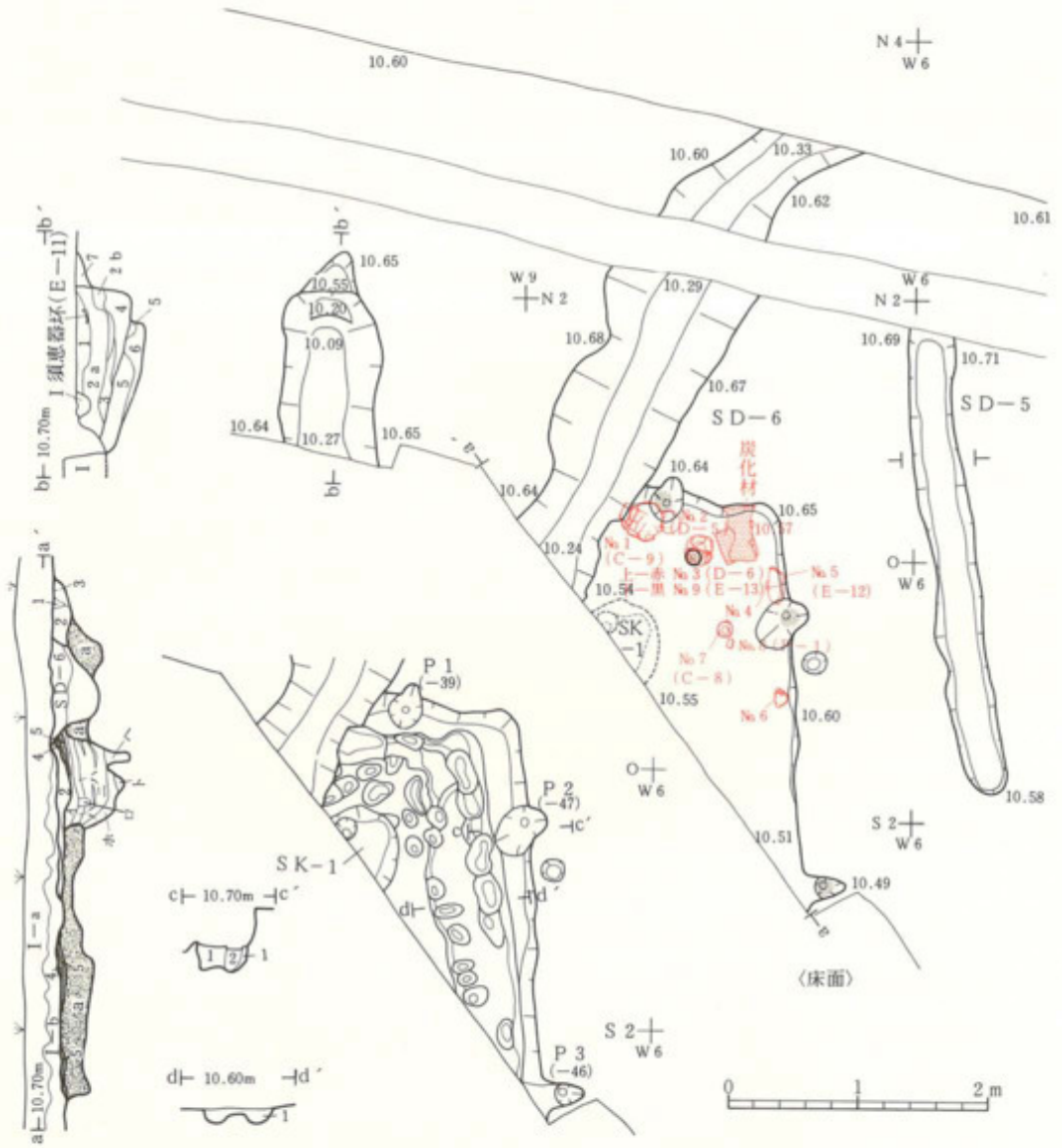
第19図　ＳＩ－３竪穴住居跡出土遺物実測図

れた。大部分は調査区外となっている。検出部も耕作の削平を受けたり、SD－６溝跡に切られている。平面形は方形を呈するものと考えられる。

［規模・方向］検出部の北壁の長さは202cm、東壁の長さは320cmを計る。住居本来の規模については、カマドが北壁中央に位置していたと仮定すると、煙道の中軸から東壁までの距離が346cmであるから、東西長は７ｍ弱と推定される。また、支柱穴と考えられ北壁から320cmの所にあるＰ．３が、SI－１竪穴住居跡東壁の３箇所の支柱穴のうちＰ.14に相当し、住居の中央付近に位置すると仮定すれば、南北長は６ｍ強と考えられる。両方を考え合せると１辺６～７ｍの比較的大形の住居であったと推定される。方向は、東壁でＮ－4°－Ｗである。

［堆積土］堆積土は耕作によって斑状に撹乱を受け、部分的には床面も削られていた。残存する住居廃絶後の堆積土は、煙道を除くと２層に分けられたが、その大部分は２層とした焼土を多く含む暗褐色シルト質粘土層が占める。煙道の堆積土は６層に分けられたが、大きく見ると１～４層と５～６層に分けられる。この境目は煙道奥壁にある段と一致するが、これは５～６層の堆積後に煙道の改修が行われた可能性を示すものと考えられる。

［壁・床面］検出部の北壁は比較的よく残っているが、東壁は南に寄るに従って削平が著しくなる。残存する床面は明赤褐色から黒色に全面が焼け、上面に炭も多く分布しており、堆積土の状況と共に、この住居が火災にあったものと判断される。北東のコーナーの壁際からは鑷



ＳＩ－４　堆積土

層 No	土　色	土　質	そ　の　他
1－a	10Y R4/4褐　色	シ　ル　ト	暗褐色土を少量含む。　鉄分土
1－b	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	黒褐色微土と明赤褐色微土のブロックを多量に含む。
1	10Y R5/6黄褐色	シ　ル　ト	灰黄褐色土を少量含む。
2	10Y R3/3暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土と灰黄褐色土の混合層。赤色及び黒色微土粒を含む。
3	10Y R5/8黄褐色	粘土質シルト	灰黄褐色土のブロックを含む。
4	10Y R5/8明赤褐色	焼　土	床面上部
5	10Y R1.7/1黒　色	焼　土	床面下部
イ	10Y R2/3黒褐色	シルト質粘土	暗褐色土との混合層
ロ	10Y R2/2黒褐色	シルト質粘土	黄褐色土を少量含む。
ハ	10Y R5/6黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土をブロック状に含む。
ニ	10Y R5/6黄褐色	シルト質粘土	褐色土と黄褐色土の混合層で明赤褐色土・黒褐色土の薄層を含む。
ホ	10Y R5/8黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をブロック状に含む。
ヘ	10Y R5/8黄褐色	粘土質シルト	明褐色土粒を含む。
ト	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土との混合層。明赤褐色土を少量含む。
a	10Y R5/8黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土)黒褐土のブロックを多量。黄褐色土のブロックを少量含む。

ＳＩ－４　煙道

層 No	土　色	土　質	そ　の　他
1	10Y R3/3暗褐色	粘土質シルト	
1	10Y R4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土質シルトを部分的に粒状に含む。
2 a	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	焼土・黒褐色シルト質粘土のブロックを全体的に含む。
2 b	10Y R3/4暗褐色	シルト質粘土	焼土を部分的に粒状に含む。
3	10Y R3/3暗褐色	粘土質シルト	地山起源のブロックを含む。
4	10Y R3/4暗褐色	粘土質シルト	黒色粘土質シルトと明黄褐色シルト質粘土のシルト質粘土の小ブロックを含む。
5	10Y R4/6褐　色	粘土質シルト	地山起源のブロックを含む。
6	10Y R3/3暗褐色	シルト質粘土	
7	10Y R5/3にぶい黄褐色	シ　ル　ト	地山起源のブロックと灰褐色シルト・黒褐色シルトを含む。

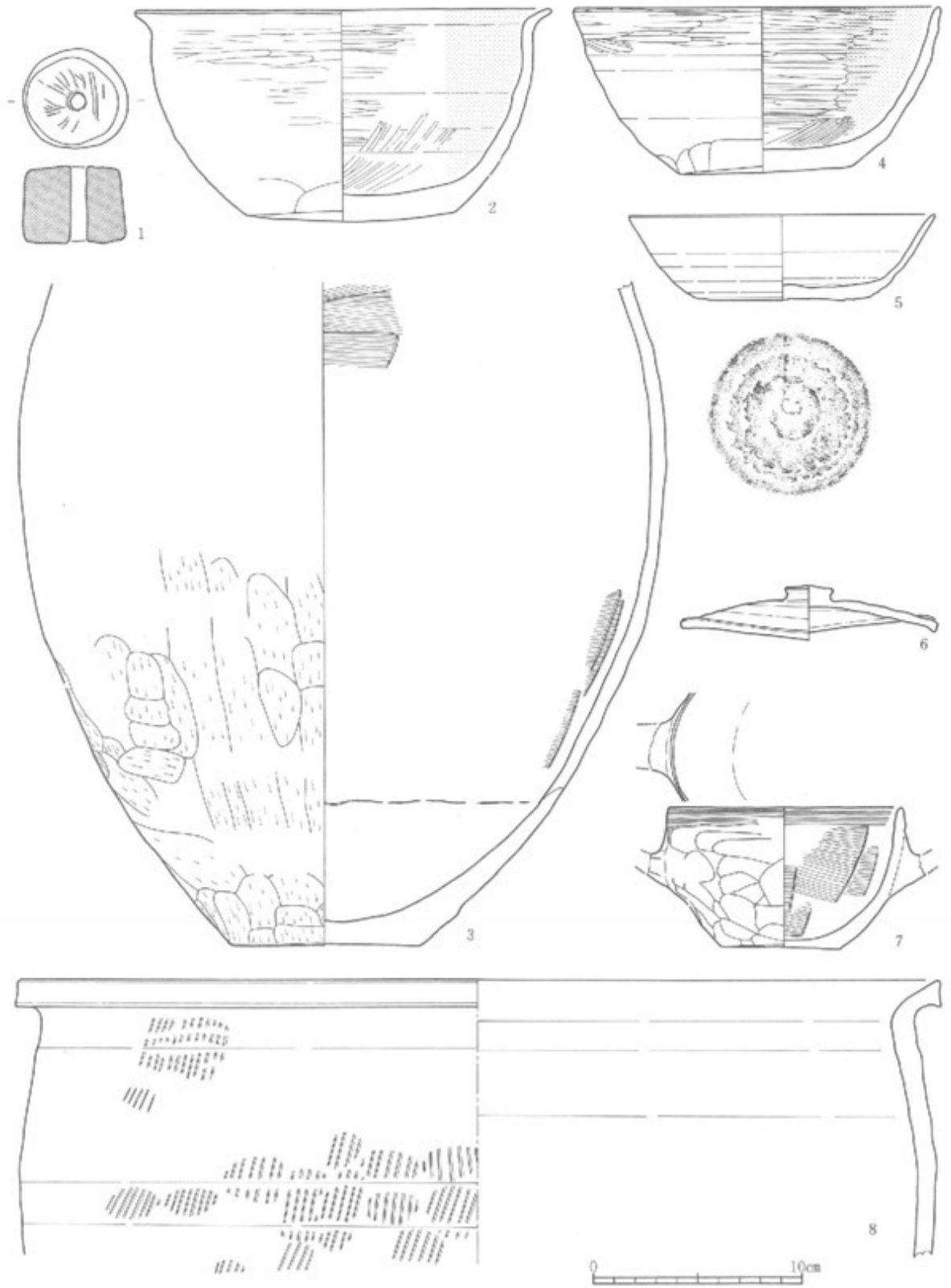
ＳＩ－４　床下溝

層 No	土　色	土　質	そ　の　他
1	10Y R4/4褐　色	粘土質シルト	暗褐色の粘土質シルトを多量に含む。

Pit 2

層 No	土　色	土　質	そ　の　他
1	10Y R4/4褐　色	シ　ル　ト	黒褐色土のブロックを含む。
2	10Y R3/3暗褐色	シルト質粘土	灰・焼土・炭化熱粒を多量に含む。

第20図　ＳＩ－４竪穴住居跡実測図



第21図　ＳＩ－４竪穴住居跡出土遺物実測図

まった炭化材も出土している。

［柱穴］ 調査範囲内では、北壁に１個と東壁に２個の支柱穴（壁柱穴）が検出された。東壁の支柱穴のＰ．２とＰ．３の柱間寸法は208cmを計る。北壁のＰ．１から東壁までの距離と東壁のＰ．２から北壁までの距離は共に90cmを計る。支柱穴は壁面を抉り込んで掘られ、平面形は不整円形を呈し、長軸42cmから短軸18cmで、床面からの深さ15cm前後を計る。掘り方埋土は褐色のシルトまたは粘土質シルトである。各支柱穴で直径12～15cmの円形の柱痕跡を確認できた。

［カマド］ 北壁側で煙道の先端側を検出したが、カマド本体は調査区外に位置する。煙道の中軸は東壁から364cmの距離である。煙道は検出部で長さ165cm・幅76cm・深さ53cmの溝状に残っており、先端程深く、奥壁には２つの段がある。

［周溝］ 周溝は床面では床が焼けているために検出されず、また住居の掘り方埋土を除去している際にも検出できなかった。

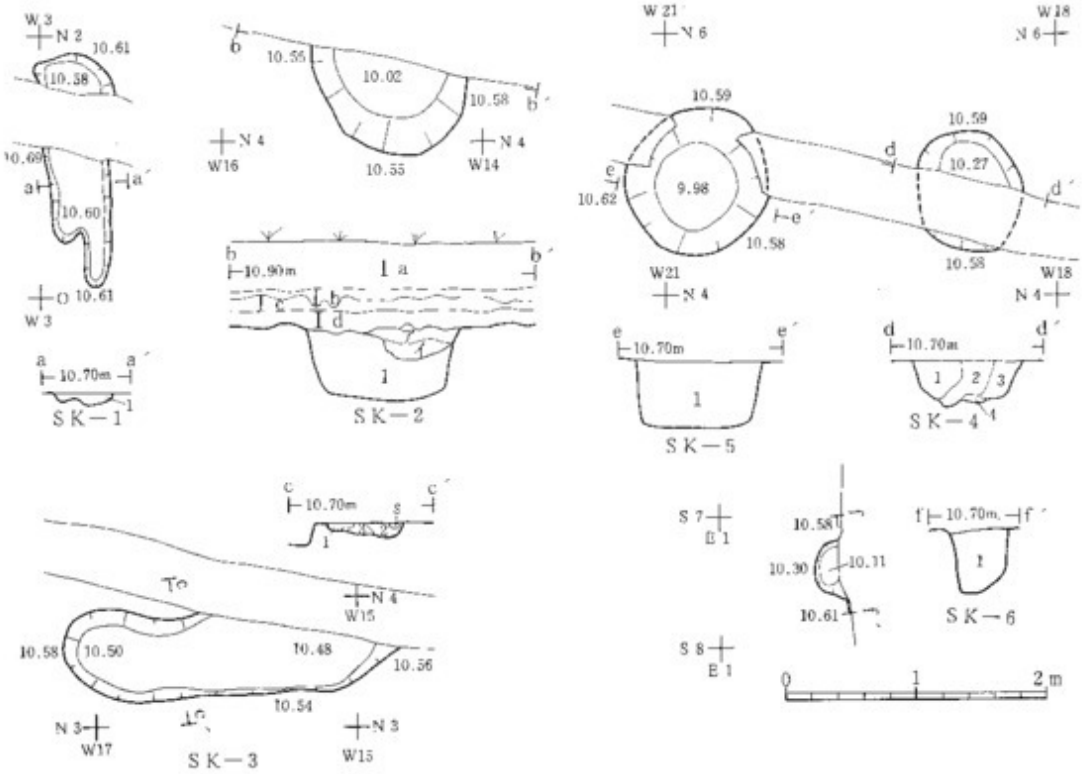
［その他の施設］ 検出部の焼けた床面上では遺構は確認出来なかったが、焼面を除去したところでSK－１土坑が検出された。SK－１土坑は調査区外に伸びるが、検出部での長軸80cm、短軸34cmの半円形を呈し、深さは48cmを計る。堆積土は黒褐色・暗褐色・黄褐色のシルト質粘土又は粘土質シルトである。

［住居掘り方］ 住居の掘り方は、中央に寄った部分は５～20cmの深さであるが、壁際はさらに20～50cmの幅に数cmの深さで溝状に掘られている。この溝の底面及び他の掘り方底面には掘削具の先端に由来すると考えられる細かな凹凸が規則的に並んで存在する。

［出土遺物］ 遺物は火災の際に放置された状態で北壁に寄って出土しており、床面からの出土遺物には土師器４点・須恵器２点、土製紡錘車１点がある。第21図１は土製紡錘車で円筒形に近い円錐台形を呈す。２は土師器の鉢で、ロクロ調整の後内外面ともヘラミガキ調整され、内面黒色処理されている。３は大形で胴部の膨らんだ土師器の長胴甕で、SD－６溝跡を掘削する際に破壊を受けているが、同溝跡の１層中から破片の一部が出土している。ロクロは使用されておらず、外面は下半がヘラケズリ、内面はヘラナデ調整される。４は土師器の坏でロクロ

遺物No	種別	器形	層位	外面調整 口縁部	外面調整 体部	外面調整 底部	内面調整 口縁部	内面調整 体部	内面調整 底部	法量 口径	法量 器高	法量 底径	残存	登録番号	写真図版
1	土製品	紡錘車	床面No.8	ナデ	ヘラミガキ	オサエ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.4	4.9	3.7	完形	P－1	39－4
2	土師器	鉢	床面No.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ ロクロ・ケズリ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10.1	20.0	10.1	略完	D－6	26－6
3	土師器	甕	床面No.1	－	上部・ナデ 下部ヘラケズリ	ヘラケズリ	－	ヘラナデ	ヘラナデ			9.2		C－9	34－9
4	土師器	坏	床面No.2	ヘラミガキ	ロクロ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.9	17.6	8.3	略完	D－5	36－5
5	須恵器	坏	煙道1層	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.1	14.6	7.8	1/4	E－11	38－3
6	須恵器	蓋	床面No.9	端部 ロクロ	体部 ロクロ	上部 回転ヘラ切り	端部 ロクロ	体部 ロクロ	上部 ロクロ	2.6	器径 12.2	2.3	完形	E－13	38－5
7	土師器	双耳坏	床面No.7	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	6.7	11.2	5.7	略完	C－8	34－8
8	須恵器	甕	床面No.5	ロクロ	平行叩き後ロクロ	－	ロクロ	オサエ後ロクロ	－		44.3			E－12	38－4

調整の後内面と外面の上部がヘラミガキ調整され、内面黒色処理されている。6は須恵器の蓋で、焼き歪みの著しい製品である。7はロクロを使用せずに作製された土師器の双耳坏で口縁部はヨコナデ、外面はヘラケズリ、内面ヘラナデ調整されている。8は口縁が開き頸部の括れない須恵器の甕で平行タタキの後ロクロ調整されている。5は煙道堆積土1層から出土した須恵器の坏で底部は回転ヘラ切り無調整である。



SK－1

層No.	土色	土質	その他
1	10YR4/2灰黄褐色	粘土	褐色土・黒褐色土のブロックを多量に含む。

SK－2

層No.	土色	土質	その他
1a			盛土（1b,6a）
1b	10YR4/2灰黄褐色	シルト	炭土（胡作土）
1c	10YR5/2にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を斑状に多く含む。
1d	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	灰黄褐色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。
ア	10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を斑状にまばらに含む。
イ	10YR3/2黒褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトを粒状にまばらに含む。
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルトのブロックを含む。

SK－3

層No.	土色	土質	その他
1	10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土のブロックを含む。
2	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	黒褐色土・褐色土・灰黄褐色土のブロックを含む。
3	10YR4/4褐色	シルト	酸化鉄マンガンを含む。

SK－4

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	褐色土のブロックを含む。
2	10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト	
3	10YR3/3黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土を斑状に含む。
4	10YR4/6褐色	シルト	黒色土のブロックを含む。

SK－5

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/2暗褐色	シルト質粘土	黒色土・暗褐色土・灰黄褐色土・褐色土のブロックを含む。

SK－6

層No.	土色	土質	その他
1	10YR3/2黒褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む。

第22図　土壙実測図

5．土　坑

SK－1土坑

SI－2竪穴住居跡の煙道の西側で検出。南北方向に長い溝状の土坑で、長軸180cm・短軸53cm、深さ10cmを計る。断面形は不整な舟底形を呈する。堆積土は灰黄褐色粘土1層。遺物は堆積土中より土師器片2点が出土している。

SK－2土坑

調査区の北辺中央付近で検出されたが、遺構の北半は調査区外にのびる。検出部での平面形は半円形を呈する。検出部で東西軸123cm・南北検出部幅71cm、深さ55cmを計る。断面形は逆台形を呈する。堆積土は黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土質シルトのブロックを含む暗褐色粘土質シルト1層。遺物は堆積中より土師器片10点が出土している。

SK－3土坑

SK－1の南西で検出された。北東部が水道管埋設溝によって壊されている。検出部での平面形は不整な長楕円形を呈する。残存部の長軸258cm・短軸64cm、深さ11cmを計る。断面形は緩く不整な舟底形を呈する。堆積土は灰黄褐色粘土質シルト・黒褐色粘土質シルト・褐色シルト層からなる。堆積土中より土師器片2点が出土している。

SK－4土坑

調査区の北西部で検出された。中央部が水道管埋設溝によって壊されている。平面形は略円形を呈し、南北軸93cm・残存部の東西軸83cm、深さ34cmを計る。断面形は不整な逆台形を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルト・灰黄褐色粘土質シルト・褐色シルト層などからなり、ブロック状の土壌を含む。堆積土中より土師器片3点・須恵器片1点が出土している。

SK－5土坑

調査区の北西部で検出された。中央の上部が水道管埋設溝によって壊されている。平面形は円形を呈し、南北軸112cm・東西軸115cm、深さ51cmを計る。断面形は逆台形を呈する。堆積土は黒色土・暗褐色土・灰黄褐色土・褐色土のブロックを含む暗褐色シルト質粘土1層。出土遺物はない。

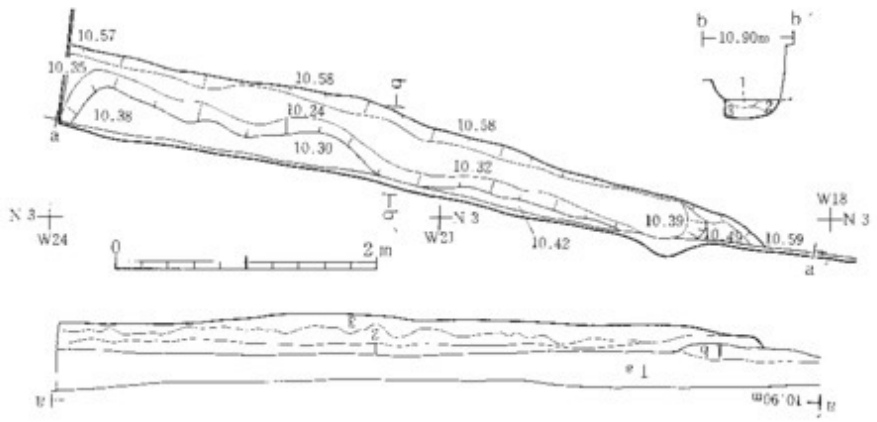
SK－6土坑

SI－1竪穴住居跡の北東角付近で検出された。西辺をSI－1竪穴住居跡に削られ、東半は調査区外となる。検出部の平面形は半円形を呈し、南北軸47cm・東西検出部軸19cm、深さ48cmを計る。断面形はU字形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色土のブロックを多量に含む黒褐色シルト質粘土1層。出土遺物はない。

6．その他の遺構

SX－2遺構

調査区北西部の南壁寄りで検出された。西及び南は調査区の外にのびる。検出部の平面形は長い二等辺三角形を呈し、長さ552cm、幅58cmを計る。遺構の壁際には上面幅31～48cm、深さ15cm前後の溝が巡り、溝は検出部の西端では南に折れ、東端付近では緩やかに立上がる。溝の内側の底面はほぼ平坦である。遺構全体の堆積土は上部から、褐色粘土質シルト・にぶい黄褐色粘土質シルト・暗褐色シルト質粘土となっている。溝の堆積土は暗褐色粘土質シルト・褐色シルト質粘土・にぶい黄褐色シルト質粘土からなる。遺物は堆積土中より土師器片16点・回転ヘラ削り調整された須恵器坏底部片１点が出土している。



SX－2内溝

層No	土色	土質	その他
1a	10YR3/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐鉄生じ
1b	10YR4/2灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄の沈着が斑状に認められる。
1	10YR4/4褐色	粘土質シルト	明赤褐色粘土質シルトを斑状に含む。
2	10YR4/3にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルトを斑状にわずかに含む。
3	10YR3/4暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土の大小のブロックを多量に含む。

層No	土色	土質	その他
1	10YR3/3暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土質シルト粒わずかに含む。
2	10YR4/4褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土粒をわずかに含む。
3	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土ブロックを含む。

第23図　ＳＸ－２遺構実測図

Ⅴ．考察と調査のまとめ

1．住居跡出土土器の分類と年代

本調査における遺物は、主に４軒の住居跡からの出土品で、土師器と須恵器が主体となるがいずれも量は少なく、実測できたのは合せて33点である。ここでは出土した土師器と須恵器をいくつかの基準で分類し、特徴を把握してうえで、その特徴と類似する土器群で構成され、尚

且つ年代的位置付けがなされている他遺跡と比較することにより本遺跡出土資料の年代を位置付けたい。

1) 土師器の分類と特徴

土師器は坏・双耳坏・鉢・甕・壺の器種がある。

＜坏＞

土師器の坏は集落跡の調査の割に少なく、4軒の住居跡合せても2点にすぎない。非ロクロのもの（A類）とロクロ使用のもの（B類）がそれぞれ1点ある。A類は大形・厚手で器高は高く、体部から口縁まで内湾しながら立つ。内面はヘラミガキ、外面は調整不明である。B類も大形で底部から口縁部まで内湾ぎみにたちあがる。底部外面と体部下端はヘラケズリされ、内面と外面の口縁部付近はヘラミガキされる。

＜双耳坏＞

双耳坏は2点あり、いずれも非ロクロである。体部から口縁部までやや内湾して立上がり、内外面ともヘラミガキ調整されるもの（A1類）と、底部から強く内湾して立ち上がり、口縁部は直立ないしやや内傾し、外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ・口縁ヨコナデ調整によるもの（A2類）がある。

＜鉢＞

鉢には非ロクロのもの（A類）とロクロ使用のもの（B類）がそれぞれ1点ある。いずれも半球形の体部に外反する短い口縁が付く。前者は外面ナデ・内面ヘラナデ・口縁部ヨコナデ調整される。後者は外面底部と体下端がヘラケズリされ、内面および外面体部上半はヘラミガキ調整される。

＜甕＞

甕は体部が球形を呈する器種（I類）と長胴を呈する器種（II類）がある。

I類は3点あるがいずれも非ロクロのもの（IA類）だけである。体部上半から口縁にかけての破片であるが、丸みのある肩部に外反する口縁が付く。口縁の接続部の内側にはわずかに稜が形成されている。調整は外面が口縁ヨコナデ・体部ハケメ、内面は口縁がヨコナデまたはハケメ・体部にヘラナデによる。

II類の甕は10点ある。いずれも体部上半に張りをもち、口縁は外反する。非ロクロのもの（IIA類）とロクロ使用のもの（IIB類）がある。IIA類は調整技法により、体部外面がナデ及びヘラナデによるもの（IIA1類）と、体部上半が須恵器甕の製作技術の影響と考えられる平行タタキ後ヨコナデ調整されているもの（IIA2類）がある。IIB類は体部上半はロクロ調整、下端付近はヘラケズリされている。

＜壺＞

壺はSI－３竪穴住居跡の床面から、非ロクロで、偏平な球形の体部に短めの外反する口縁が付くものが１点出土しているだけである。調整は内外面ともヘラミガキによる。

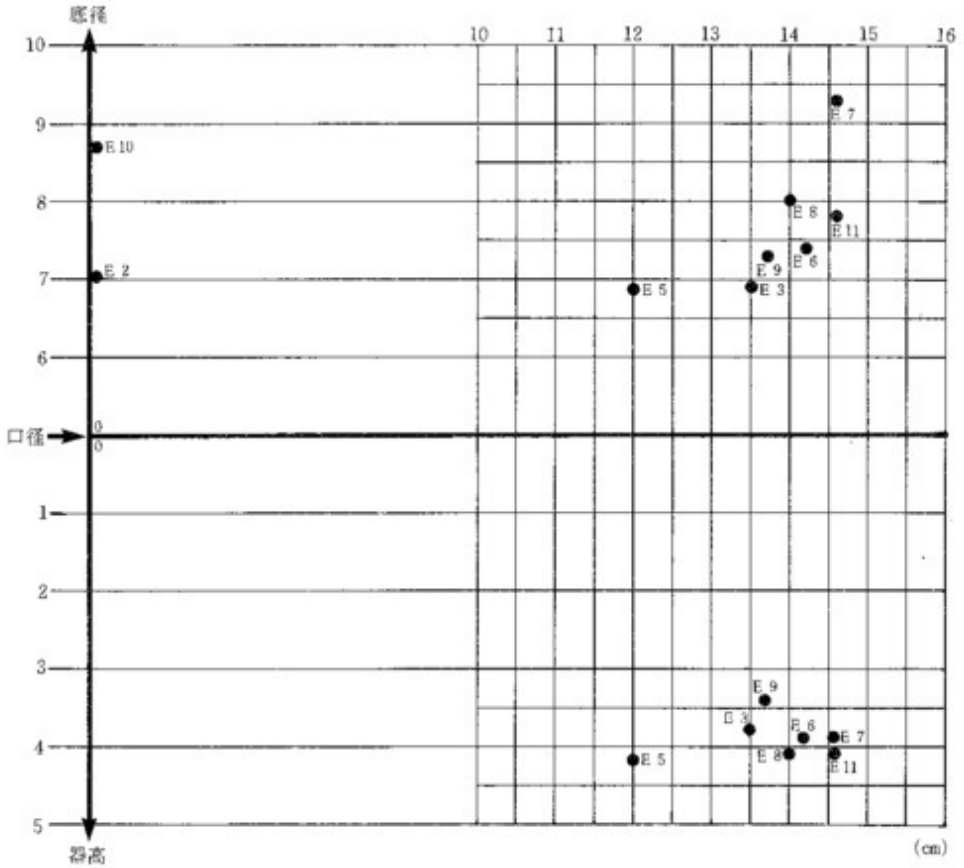
2)　須恵器の分類と特徴

須恵器には坏・蓋・甕の器種があるが、中では坏類の量が多い。SI－１・２・４竪穴住居跡から出土している。

＜坏＞

須恵器坏は９点ある。これらの坏は出土層位・切離し技法及び切離し後の調整に相違があるが、口径に対して底径も大きく、しかも口径の割に器高が高いという器形としての類似性は強い。口径・底径・器高をグラフに表わすと第24図のようになり、口径は12.0cm～14.6cm、底径は6.9cm～9.3cm、器高は3.4cm～4.2cmの範囲にまとまる。一部やや突出したものを除くさらに強い類似性をもつ。

切離し技法及び切離し後の調整により分類すると、回転ヘラ切り無調整のもの(Ａ１類)、回



第24図　須恵器坏法量比較図

転ヘラ切り後回転ナデ調整のもの(A２類)、切り離し技法不明で手持ちヘラケズリ調整のもの（B１類)、切り離し技法不明で回転ナデ調整のもの（B２類)、回転糸切り無調整のもの（C類）に分けられる。

第２表　出土土器分類表

種別	器種 大別	器種 細別	分類基準及び特徴 大別	分類基準及び特徴 (細別)	遺体発掘番号と出土地点 SI-1 1層	SI-1 2層	SI-1 SK13	SI-1 SK13-5・7	SI-1 SK19	SI-1 竪道	SI-1 床直	SI-1 P-2	SI-2 1層	SI-2 SK12	SI-3 2層	SI-3 床面	SI-4 竪道	SI-4 床面	個体数
土師器	坏		A.非ロクロ	大形・厚手で、体部から口縁まで内湾しながら立つ。	C1														1
			B.ロクロ使用	大形で、底部から口縁まで内湾ぎみに立つ。底部ヘラケズリ。口縁外面もヘラミガキ。														D5	1
	双耳坏		A.非ロクロ	1．内外面ともヘラミガキによる調整。			C2												1
				2．外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁ヨコナデによる調整。														C8	1
	鉢		A.非ロクロ	平底形の体部に強く外反する口縁がつく。外面ナデ、内面ヘラナデ、口縁ヨコナデ。				C3											1
			B.ロクロ使用	半球形の体部に強く外反する口縁がつく。内面及び外面の体部から口縁までヘラミガキ。														D6	1
	甕	Ⅰ.体部球形	A.非ロクロ	丸味のある胴部に外反する口縁が付き、接続部の内側にわずかに稜がつく。体部外面はヘラナデ、内面はヘラナデによる。											C5 C6 C7				3
		Ⅱ.体部長胴	A.非ロクロ	1．体部上半に張りをもち、体部外面がナデ及びヘラナデにより調整される。		C12 C14												C9	2
				2．体部上半に張りをもち、体部外面上半は平タタキ後ヨコナデ、下半はヘラナデ調整。		C15													1
				(体部下半の破片で、体部外面はナデまたはヘラナデ、内面はナデ及びヘラナデ調整。底部に木葉痕があるもの(C10・11)もある。)		C10 C11					C13								(3)
			B.ロクロ使用	体部上半に張りをもち、口縁は外反する。体部上半はロクロ調整、下半はヘラケズリされる。		D2	D3		D9	D1									4
	壺		A.非ロクロ	偏平な球形の体部に短めの外反する口縁がつく。内外面ともヘラミガキ。												C4			1
須恵器	坏		A.回転ヘラ切り	1．無調整							F7	F8					E11		3
				2．回転ナデ調整	F3						E6			E10					3
			B.切り離し不明	1．手持ちヘラ削り調整	E2														1
				2．回転ナデ調整		E5													1
			C.回転糸切り	無調整									E9						1
	蓋			扁平な擬宝珠つまみから傘状に開く蓋で、端部は丸味をもって下方に折れる。	(E1)													F13	(2)
	甕	Ⅰ.大形		口頸部のない広口の甕で、体部と口縁の境がわずかにくびれ、口縁は強く外反。平行タタキの後ロクロ調整される。														F12	1
		Ⅱ.小形		口頸部のない広口の甕で、体部と口縁の境がわずかにくびれ、口縁は強く外反。外面はロクロ調整による。	C4														1

＜蓋＞

2点出土しているが、1点は端部付近の破片である。完形の1点は偏平な擬宝珠つまみのついた頂部から傘状に開く蓋で、端部は丸みをもって短く下方に折れる。

＜甕＞

須恵器甕は2点出土しているが、両方とも口頸部のない広口の甕で体部と口縁部の境がわずかに括れ、口縁は強く外反する。大きさによって大形のもの（Ⅰ類）と比較的小形のもの（Ⅱ類）に分けられる。Ⅰ類の外面にはロクロ調整以前に行われた平行タタキ調整の痕跡を止どめるが、Ⅱ類はロクロ調整痕のみが観察される。

以上出土土師器と須恵器の特徴の概要と分類について記述したが、分類毎の個体と出土地点を一覧表にしたものが第2表である。

3) 住居跡における土器群の様相と年代

前2節では出土土師器と須恵器との分類を通してその特徴を観察し、さらにその出土状況（共伴関係）を第2表によって確認した。ここではこれをもとに、各住居跡の土器について個別的にあるいは相対的に検討し、その年代について考えて見ることにする。

まず各竪穴住居跡からの出土土器を、床面や住居付属施設の出土資料からみてもまた堆積土中の出土資料からみても、SI－3竪穴住居跡とそれ以外のSI－1・2・4竪穴住居跡とでは様相が異なっていることが指摘できる。すなわちSI－3竪穴住居跡からはロクロ使用の土師器や須恵器を出土せず、また堆積土の2層から出土した3点の非ロクロ土師器甕は、全て体部が球形を呈し、体部外面の調整はハケメによっている。体部外面がハケメ調整された体部が球形を呈するという特徴の甕だけでは時期を決定しえないが、床面出土の壺を、色麻古墳群11号住居跡出土資料（古川：1983…第92図5・6）や、留沼遺跡竪穴遺構及び第3溝出土資料（手塚：1980…第10図6・第20図1）の広口短頸壺（註1）の系譜として考えると、SI－3竪穴住居跡の出土土師器は2層出土の甕を含めて、古墳時代前期の塩釜式期に位置付けることができる。したがってSI－3竪穴住居跡の年代も塩釜式期に位置付けられる。

次にSI－1・2・4竪穴住居跡出土の土器について考える。まず3軒のうち出土遺物量の多いSI－1・4竪穴住居跡の土器について検討する。SI－1竪穴住居跡は床面からの出土土器は少ないが、住居内施設及び床面に近い堆積土2層下部からやや多くの土器が出土している。土師器は非ロクロのものとロクロ使用のものが混在しているが、このような現象は土師器製作にロクロの導入がなされて成立した「表杉ノ入式」期の全期に共通する。この表杉ノ入式の初期的状況（またはその前型式である国分寺下層式の終末的状況）としてロクロ使用の土師器に伴って非ロクロの土師器坏が共伴する場合を「伊治城型組成の土器群」と呼び、国分寺下層式と表杉ノ入式の中間に位置付け、伊治城創建や胆沢城創建との関連により8世紀末頃の年代が与え

られている（宮城県多賀城跡調査研究所：1988）が、SI－1竪穴住居跡1層出土の非ロクロ土師器坏の存在を以て直ちに伊治城型の土器組成との関連を考えることはできない。しかし住居内施設のSK－3土坑から非ロクロの土師器双耳坏が出土していることは注意を要する。また、須恵器坏については分類と特徴の項で述べたとおり、SI－1竪穴住居跡内出土品だけでなくSI－2・4竪穴住居跡出土品を含めても強い器形の共通性があるが、口径に対して底径も大きく、しかも口径の割に器高が高いという器形の特徴と、坏底部が回転ヘラ切り無調整を主としこれにヘラ切り後再調整されるものや切離し技法不明で手持ちヘラケズリされるもの、糸切り無調整のものが少量加わる状況は、「伊治城型組成の土器群」や多賀城跡出土土器の「B群土器」や「C群土器」（白鳥：1980）との共通性も高い。多賀城跡出土土器の「B群土器」は「伊治城型組成の土器群」と同じ8世紀末の年代観が与えられている。多賀城跡出土土器の「B群土器」と「C群土器」を比較すると、B群土器段階の土師器甕にはロクロ使用のものが含まれておらず、ロクロ使用の土師器甕はC群土器段階で出現する。この点を考慮するとSI－1竪穴住居跡内床面と施設において、あるいは堆積土2層中で非ロクロとロクロ使用の土師器甕が共伴していることから、9世紀前半に位置付けられているC群土器段階の状況に近いと言える。ただし、伊治城型組成の土器群にあっては非ロクロ土師器坏に伴ってロクロ使用の土師器甕が出土しているので、必ずしもC群段階と言うことはできないようである。いずれ伊治城と多賀城における研究成果に照らして考えるならば、SI－1竪穴住居跡及びその出土遺物は堆積土のものを含め、8世紀最終末から9世紀前葉にかけての時期の所産と考えられる。

SI－4竪穴住居跡は火災に遭ったため床面から比較的まとまった土器が出土している。この住居跡の土師器について見ると、鉢・坏はロクロが使用されているが、双耳坏及び甕についてはロクロが使用されていない。双耳坏がロクロを使用せずに作製されている点はSI－1竪穴住居跡出土のものと共通する。ロクロ使用の坏と鉢についてみると底部切離し後外面の体部下端から底面全体を丁寧にヘラケズリし、底面が凸面となっており、国分寺下層式末期の土師器坏や椀形土器との関連を想起させるが、これが国分寺下層式の影響によるものとすれば、これらの坏と鉢は表杉ノ入式でも古く、9世紀前後のものである可能性が考えられる。またロクロ使用の土師器坏と、須恵器の器形を模倣したと考えられる非ロクロの双耳坏を以て直ちに「伊治城型組成の土器群」との共通性を指摘することはできないが、SI－1竪穴住居跡同様注意を要する。なお須恵器の器種としての双耳坏は猿投窯ＮＮ32号窯式期（760～780年頃）に出現し、猿投窯ＩG78号窯式期（9世紀中頃）まで製作されるもののようである（楢崎：1983）が、本調査で出土した土師器の双耳坏も、この時期のいずれかの製品を模倣したものと考えられる。

SI－2竪穴住居跡は床面からの出土土器はなく、また堆積土中及び住居内施設からそれぞれ須恵器坏の破片が1点出土しているだけであり、この遺物からだけで年代の決定は困難である

が、SI－1・2・4竪穴住居跡は建物の方向・配置・支柱穴（壁柱穴）の配列等において関連性を認めることができるので、SI－1・4竪穴住居跡と同じく8世紀最終末から9世紀前葉頃の年代が考えられる。

2．掘立柱建物跡・溝跡・土坑・その他の遺構の年代

1）掘立柱建物跡

2棟の掘立柱建物跡はいずれも時期決定ができる資料はないが、SB－2掘立柱建物跡については、柱穴及び柱痕跡が大きく、またSI－1・3・4竪穴住居跡と共通する方向を示すことから古代のものと考えられる。SB－1掘立柱建物跡は古代のものか中世あるいは近世のものか判断できない。

2）溝　跡

各溝跡とも出土が少なく、十分に絞った年代がわかるものはない。相対的年代としてはSD－4溝跡がSI－2竪穴住居跡より古く8世紀最終末から9世紀中葉以前、SD－6溝跡とSD－7溝跡がそれぞれSI－4・SI－1竪穴住居跡より新しく8世紀最終末から9世紀前葉以降である。なおSD－6溝跡の1層中から鉄釉の陶器片が出土しているので下限は近世以降に求められる。SD－1・2・3・5溝跡については時期不明である。

3）土　坑

土坑は、SK－6土坑が重複関係においてSI－1竪穴住居跡より古いということ以外は全て時期不明である。ただ堆積土の状況から判断すると、SK－5土坑は比較的新しいもののようである。

4）その他の遺構

SX－2遺構は、土師器片と回転ヘラケズリ調整された須恵器坏の底部片が出土しており、古代の遺構の可能性はあるが、ここでは可能性の指摘に止どめたい。

3．SI－1・2・4竪穴住居跡の関係について

1節では竪穴住居跡の年代について考察し、その結果調査区の北東部で接近して検出されたSI－1・2・4の3軒の竪穴住居跡は、いずれも8世紀最終末から9世紀前葉の年代のものであることが指摘できた。ここではこれらの住居跡の相互の関係について考察してみたい。

まず各住居が同時に存在したのか、時期差があるかについて検討する。SI－1竪穴住居跡とSI－2竪穴住居跡の場合は、SI－1竪穴住居跡の煙道の先端がSI－2底穴住居跡の南壁に接し

第3表　SI－1・2・4竪穴住居跡出土土師器集計表

住居番号	器種	掘り方		周溝		床面		堆積土（2層）		堆積土（1層）		Pit 2		Pit 4		Pit 7		SK－2	
		ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ	ロクロ	非ロクロ
SI－1	甕		30		23	2	33	3	12	3	184	－	－	－	－	－	－	－	－
	坏	4		2?	1					3?	33?	－	－	－	－	－	－	－	－
SI－2	甕		3		1			－	－		33		－		1		1		2
	坏							－	－	3?	27		－	－	－	－	－	－	－
SI－3	甕		26		2		7	－	－		15		2	－	－	－	－	－	－
	坏	1?				1		－	－		1			－	－	－	－	－	－
	瓦							－	－		1		－	－	－	－	－	－	－

※ 明らかに古墳時代のもの2点を含む

ているので共存したとは考えられない。SI－2竪穴住居跡とSI－4竪穴住居跡の場合は、SI－4竪穴住居跡が火災住居であるのに対し、SI－4竪穴住居跡の東壁と2.3mしか離れないで西壁が平行するSI－2竪穴住居跡が延焼をまぬがれたとは考えられないので、両住居の共存した可能性はない。またSI－1竪穴住居跡とSI－4竪穴住居跡との場合も、推定されるSI－4竪穴住居跡南東角とSI－1竪穴住居跡の北西角とは3.5m前後しか離れておらず、実際の軒はもっと接近していたことを考慮すると、SI－2竪穴住居跡同様に延焼しなかったとは考えられないので、この関係でも共存の可能性は少ない。以上のように出土遺物等では同時代性の強い3軒の住居跡も、配置関係と火災の状況から見るとそれぞれに多少の時期差があると判断できる。

次に、3軒の住居の前後関係について検討する。すでに述べたように3軒の住居は8世紀最終末から9世紀前葉という比較的短い期間内での前後関係にあるため、実測した限られた遺物からでは前後関係を決定できないので、出土遺物の全体の状況を以て判断を試みる。3軒の住居の層位毎の出土遺物の概要を、ロクロ使用か非ロクロかにより、甕と坏に分けて集計したものが第3表である。SI－1竪穴住居跡の各施設の状況は省略してある。この表によると、SI－2・4竪穴住居跡からは、掘り方・周溝・床面・堆積土のいずれからもロクロを使用した土師器の甕は出土していないことがわかる。これに対し、SI－1竪穴住居跡では、掘り方及び周溝からはロクロ土師器甕は出土していないが、床面・堆積土2層・堆積土1層の段階になると、実測図にも示したようにロクロ使用の土師器甕が出現する。このような状況は、表杉ノ入式期ではロクロ使用と非使用の土師器甕が共存するとはいえ、ロクロ非使用の段階からロクロ使用への転換期に当たる8世紀終末から9世紀初頭頃の段階においては、ロクロ使用の土師器甕の出土していないSI－2竪穴住居跡とSI－4竪穴住居跡の方が、SI－1竪穴住居跡より古いことを示していると考えられる。

では、SI－2竪穴住居跡とSI－4竪穴住居跡の新旧はどうであろうか。この関係については、遺物の比較では解決できない。そこでこれについてはSI－1竪穴住居跡を含めた仮説をもとに

考えて見たい。すでに報告したように3軒の住居は近接し、建物の方向を同じくし、南小泉遺跡ではこれまでに類例のない配置の支柱穴（壁柱穴）を持つなど極めて類似性のある住居であることから、これらの住居は同一集団によって営まれ、建て替えによる変遷と解釈すれば。SI－4竪穴住居が火災に遭ったために、その直ぐ東にSI－2竪穴住居を建て、その後SI－2竪穴住居へと移ったものと想像される。このような仮説をたて、SI－2竪穴住居跡が、他の2軒の住居跡より規模が小さいこと、主柱穴が北辺となる2箇所だけであること、住居の掘り方が浅いこと、カマドの燃焼部にあたる部分の床面が赤変するほど焼けていないこと、床面に住居内施設としての土坑が一つしか掘削されていないこと、住居に土器等の遺物がほとんど残されていないことなどを考えあわせると、SI－2住居跡はSI－4住居焼失後、本格的な住居の再建としてSI－1住居を建てるまでの仮住い的住居として建てられたものと解釈できる。使用期間が極めて短期間であったことが、SI－2住居跡の調査結果をよく反影していると思われる。

以上のような検討の結果、調査区北東部の3軒の住居跡については、同一集団によって営まれ、その変遷はSI－4住居跡→SI－2住居跡→SI－1住居跡の順番であり、SI－2住居跡についてはSI－4住居跡の焼失後、SI－1住居跡再建までの仮設的住居と考えたい。

4．調査のまとめ

南小泉遺跡第20次調査の事実報告と、出土遺物と遺構の年代観についての若干の考察を述べてきた。考察項目についてはさらに検討が必要と思われる。また、本調査で検出された各遺構が南小泉遺跡においてどのような歴史的位置を占めるのか、今後の調査の進展に応じて考察を続けていく必要もあろうが、これまで述べたことのまとめを行い、報告の終わりとしたい。

①．南小泉遺跡は広瀬川の北岸に形成された自然堤防上に立地し、今回の調査区は遺跡の南端中央部に位置する。

②．260㎡の調査を行ない、竪穴住居跡4軒・掘立柱建物2棟・土坑6基・溝跡7条・ピット34個・その他の遺構1基が検出された。

③．竪穴住居跡は塩釜式期（4世紀代）のもの1軒と表杉ノ入式期のもの3軒がある。

④．南小泉遺跡で本格的な調査によって、塩釜式期の竪穴住居跡が発見されたのは今回の調査が始めてである。

⑤．表杉ノ入式期の竪穴住居跡は3軒とも、同型式の初期段階の8世紀最終末から9世紀前葉に位置付けられる。

⑥．表杉ノ入式期の3軒の竪穴住居跡は同時に存在したのではなく、SI－4→SI－2→SI－1竪穴住居跡という変遷過程が考えられる。

⑦. 掘立柱建物は2棟検出されているが、このうちSB－2は柱穴の規模から古代の遺構と考えられ、配置・方向から表杉ノ入式期の竪穴住居跡と関係する可能性がある。

⑧. 土坑6基・溝跡7条・ピット34個・その他の遺構1基については、溝跡で相対年代の知られるものが数条ある以外は、年代・性格が明らかなものはない。

（註1） 古川：1983「色麻古墳群」では第11号住居跡出土の当該器種を「埦」として分類し、また手塚：1980「留治遺跡」では当該器種を「甕」として分類している。なお、丹羽：1985「今熊野遺跡」では当該器種3点を「壺」として分類しているので、本書では本文の器種分類と同じ「壺」として引用した。

<引用・参考文献>

第1表　南小泉遺跡次数別調査成果一覧表の文献に掲げた南小泉遺跡関係の調査報告関係の文献の全て。

氏家和典(1957)：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

奥津春生(1973)：「大仙台圏の地盤・地下水」宝文堂

工藤・荒井(1990)：「仙台市中在家南遺跡出土の木製品」考古学ジャーナル323

小井川和夫(1981)：「上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集

白鳥良一(1980)：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

菅原祥夫(1988・1989)：「伊治城」－昭和62・63年度発掘調査概報　築館町文化財調査報告書第1・2集

中村　浩(1990)：「須恵器」柏書房

楢崎彰一・斎藤孝正(1983)：「猿投窯編年の再検討について」愛知県陶磁資料館「研究紀要」2

丹羽　茂(1982)：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第96集

丹羽　茂(1985)：「今熊野遺跡」宮城県文化財調査報告書第104集

古川一明(1983)：「色麻古墳群」宮城県文化財調査報告書第95集

宮城県多賀城跡調査研究所(1977・1978・1979)：「伊治城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」

森　貫喜(1982)：「水入遺跡発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第84集

第4表　登録遺物目録

C．非ロクロ土師器

単位はcm，（　）内は現存値

登録番号	出土地点	出土層位	種別	器形	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	挿図番号	写真番号
C－1	SI－1	1　層	土師器	坏	15.2	-	(6.5)	不　明	ヘラミガキ，黒色処理	12－1	34－1
C－2	SI－1内SK－3		土師器	双耳坏	11.8	－	(3.9)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	12－2	34－2
C－3	SI－1内SK-3・5・7		土師器	鉢	16.0	－	(9.3)	口縁ヨコナデ体部ナデ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	12－10	34－3
C－4	SI－3	床　面	土師器	壺	14.0	4.8	(30.4)	口縁～体部ヘラミガキ，底部ヘラケズリ	口縁～体部ヘラミガキ	19　4	34－4
C－5	SI－3	2　層	土師器	甕	16.0	－	(3.8)	口縁ヨコナデ，体部ハケメ	？	19－3	34－5
C－6	SI－3	2　層	土師器	甕	16.5	－	(7.7)	口縁ヨコナデ，体部ハケメ	口縁ハケメ，体部ヘラナデ	19－1	34－6
C－7	SI－3	2　層	土師器	甕	18.0	-	(7.8)	口縁ヨコナデ，体部ハケメ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	19－2	34－7
C－8	SI－4	床　面	土師器	双耳坏	11.2	5.7	6.7	口縁ヨコナデ，体部ヘラケズリ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	21－7	34－8
C－9	SI－4	床　面	土師器	甕	－	9.2	(31.9)	体部上半ナデ，下半ヘラケズリ	ヘラナデ	21－3	34－9
C－10	SI－1	2　層	土師器	鉢	－	8.7	(7.7)	体部ナデ，底面木葉痕	ヘラナデ	13－5	35－1
C－11	SI－1	2　層	土師器	甕	-	6.8	(8.0)	体部ヘラナデ，底面木葉痕	ヘラナデ	13－4	35－2
C－12	SI－1	2　層	土師器	甕	21.3		(11.2)	口縁部ヨコナデ，体部ハケメ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	13－1	35－3
C－13	SI－1	床　面	土師器	壺	－	7.4	(14.8)	体部ナデ，下端ヘラケズリ	体部ヘラナデ，底部ナデ	13－6	35－4
C－14	SI－1	2　層	土師器	甕	19.4	－	(15.5)	口縁部ヨコナデ，体部ヘラナデ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	13－3	35－5
C－15	SI－1	2　層	土師器	甕	20.7	－	(21.9)	口縁ヨコナデ，体部叩き後ヨコナデ・ヘラナデ	口縁ヨコナデ，体部ヘラナデ	13－2	35－6

D．ロクロ土師器

登録番号	出土地点	出土層位	種別	器形	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	挿図番号	写真番号
D－1	SI－1	2　層	土師器	甕	21.1	－	(23.9)	ロクロ，下半ヘラケズリ	ロクロ	14－1	36－1
D－2	SI－1　竈 道	13・14層	土師器	壺	20.5	-	(21.9)	ロクロ，下端ヘラケズリ	ロクロ	14－2	36－2
D－3	SI－内SK－9	3　層	土師器	鉢	16.6	－	(9.7)	ロクロ	ロクロ	14－4	36－3
D－4	SI－内SK－3	－	土師器	甕	19.5	－	(7.3)	ロクロ	ロクロ	14－3	36－4
D－5	SI－4	床　面	土師器	坏	17.6	8.3	7.9	口縁ヘラミガキ，体部ロクロ，底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	21－4	36－5
D－6	SI－4	床　面	土師器	鉢	20.0	10.1	10.4	口縁～体部ヘラミガキ，体部～底部ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	21－2	36－6

E．須恵器

登録番号	出土地点	出土層位	種別	器形	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部切離し技法	挿図番号	写真番号
E－1	SI－1	1　層	須恵器	蓋	16.0	－	1.7	ロクロ	ロクロ		12－9	37－1
E－2	SI－1	1　層	須恵器	坏	－	7.0	(2.7)	－	ロクロ	不明後手持ちヘラケズリ	12－4	37－2
E－3	SI－1	1　層	須恵器	坏	13.5	6.9	3.8	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り後ロクロナデ	12－3	37－3
E－4	SI－1	1　層	須恵器	甕	30.3	－	(12.7)	ロクロ	ロクロ	－	14－5	37－4
E－5	SI－1	2　層	須恵器	坏	12.0	6.9	4.2	ロクロ	ロクロ	不明後ロクロナデ	12－5	-
E－6	SI－1	床	須恵器	坏	14.2	7.4	3.9	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り後ロクロナデ	12－6	37－5
E－7	SI－1	床	須恵器	坏	14.6	9.3	3.9	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	12－7	37－6
E－8	SI－1内P．2	掘り方	須恵器	坏	14.0	8.0	4.1	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	12－8	38－1
E－9	SI－2	1～2層	須恵器	坏	13.7	7.3	3.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	17－1	38－2
E－10	SI－2内SK－2	－	須恵器	坏	-	8.7	(1.4)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り後ロクロナデ	17－2	－
E－11	SI－4　竈 道	1　層	須恵器	坏	14.6	7.8	4.1	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	21－5	38－3
E－12	SI－4	床　面	須恵器	鉢	44.3	－	(14.0)	平行叩き後ロクロ	ロクロ	－	21－8	38－4
E－13	SI－4	床　面	須恵器	甕	12.2	ヲヤ12.3	2.6	ロクロ，頂部ヘラケズリ	ロクロ	－	21－6	38－5

I．陶器類

登録番号	出土地点	出土層位	種別	器形	口径	底径	器径	外面	内面	挿入番号	写真番号
I－1	－	表　土	施釉陶器	鉢？	－	6.1	(4.4)	暗オリーブ灰色釉，褐鉄部鉄化粧	暗オリーブ灰色釉	6－1	

K．石器・石製品

登録番号	出土地点	出土層位	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考	挿図番号	写真番号
K－1	-	表　土	有角石斧	11.1	5.2	2.7	180.8ｇ	砂岩	全面磨滅	6－2	39－1
K－2	SI－1	1　層	石鏃？	(2.6)	(2.6)	(0.7)	5.5ｇ	砂岩		15－4	39－2
K－3	SI－1	1　層	石匙	(4.4)	2.3	0.7	7.6ｇ	珪質頁岩	つまみ部欠損	15－5	39－3

N．金属製品

登録番号	出土地点	出土層位	材質	種別	長さ	幅	厚さ	備考	挿図番号	写真番号
N－1	SI－1	1　層	鉄	？	6.1	1.0	0.4	断面四角の棒状	15－2	38－6
N－2	SI－1	覆　土	鉄	？	(5.0)	5.5	(1.6)	茎身の刃部に相当	15－1	38－7
N－3	SI－1内P．8	掘り方	鉄	？	19.5	1.9	1.2	角棒状で，中央部の断面に段がある。	15－3	38－8

P．土製品

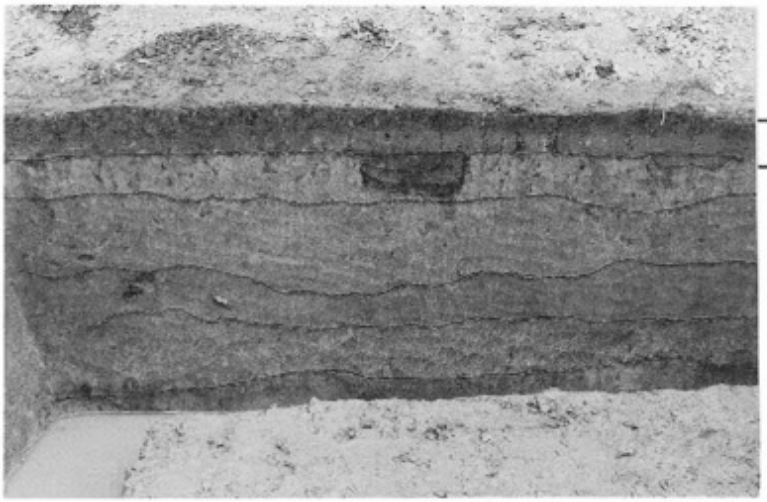
登録番号	出土地点	出土層位	種別	備考	挿図番号	写真番号
P－1	SI－4	床　面	紡錘車	円錐台形，頂面径4.4　底面径4.9　高さ3.7　孔径0.8	21－1	39－4

写　真　図　版

写真－1　遺　跡　遠　景

写真－2　調査区全景(南より)

写真－3　調査区全景(西より)

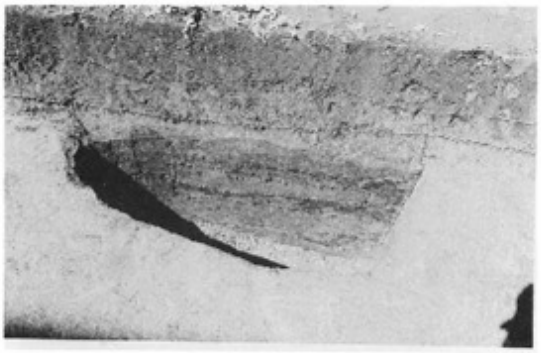


写真－4
基本層断面
(南東部)

写真－5　ＳＢ－１掘立柱建物跡柱穴断面
(西列南２－南より)

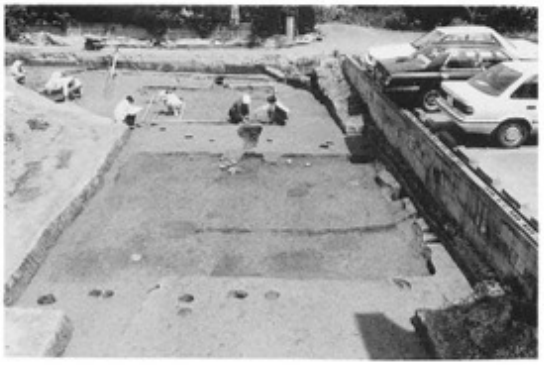
写真－6　ＳＢ－１掘立柱建物跡(南より)

写真－7　ＳＢ－２掘立柱建物跡・ＳＤ－１・２・３溝跡(南より)

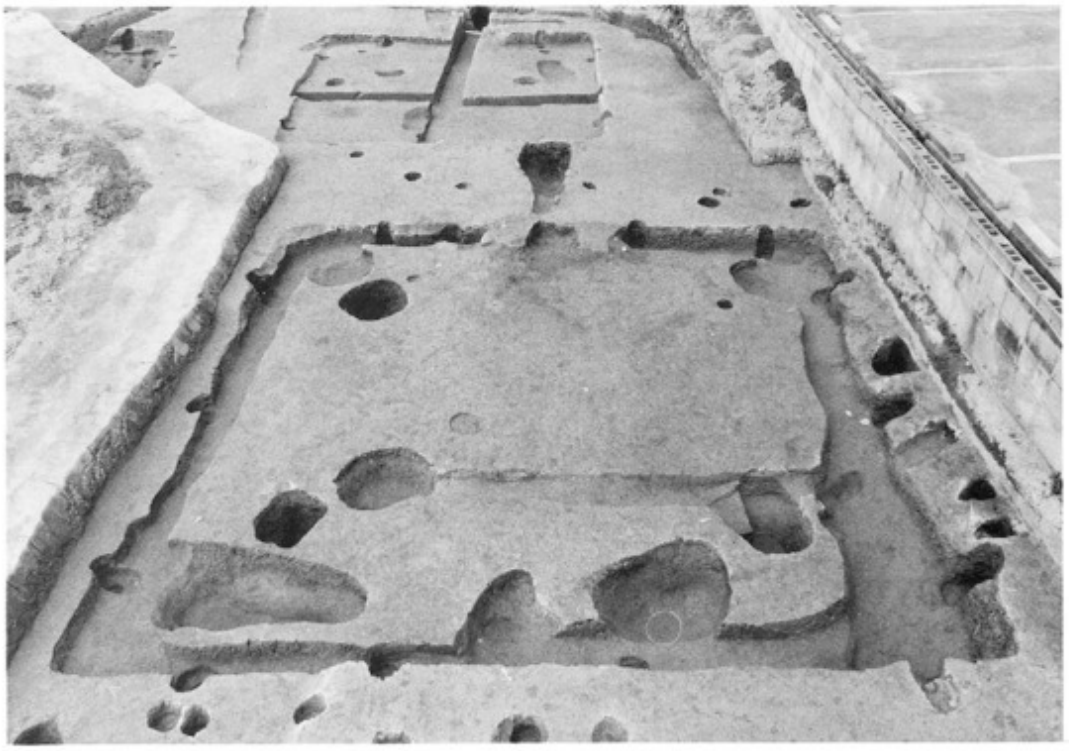


◀写真－8　ＳＢ－２掘立柱建物跡柱穴断面１
(東１南１)

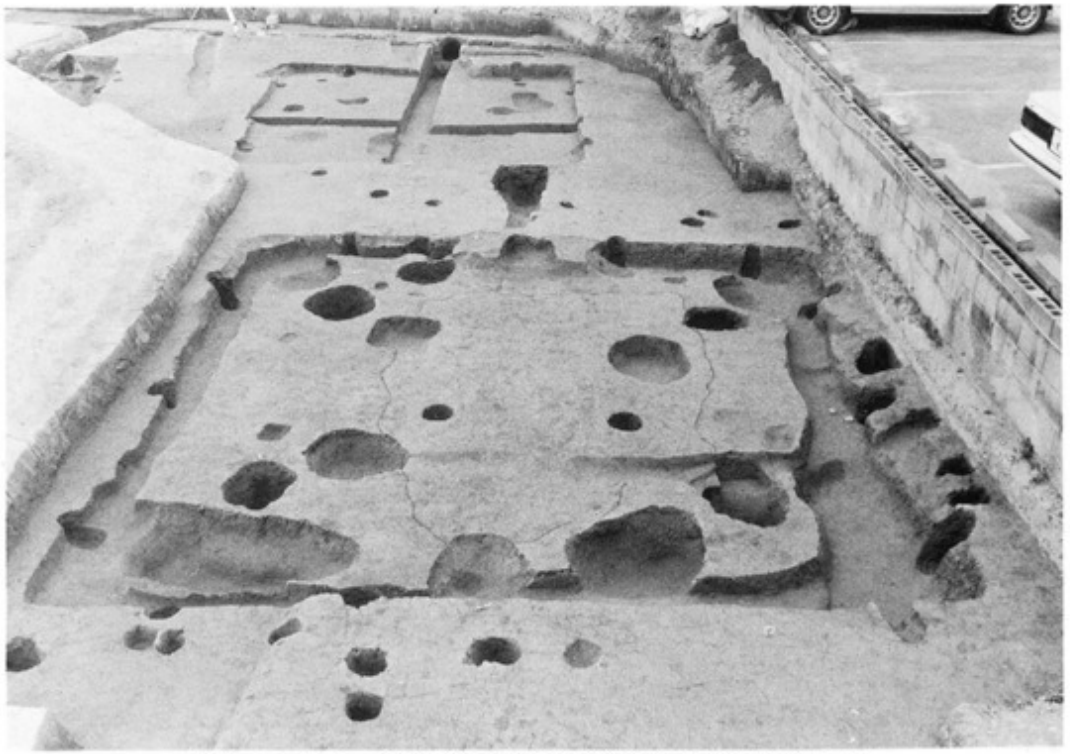
▲
写真－9　ＳＢ－２掘立柱建物跡柱穴断面２
(東１北１)



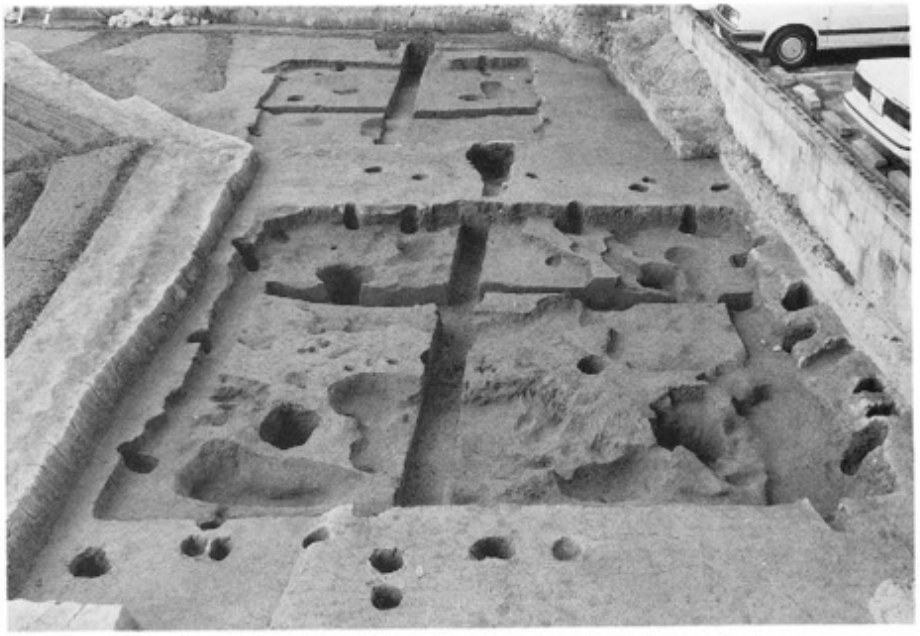
◀写真－10　ＳＤ－７溝跡・ＳＩ－１竪穴
住居跡床面検出状況(南より)



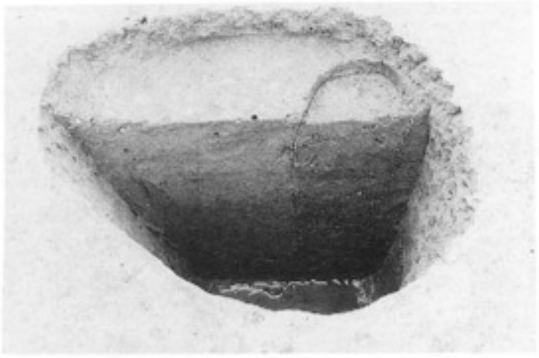
写真—11　ＳＩ—１竪穴住居跡床面遺構完掘状況(南より)



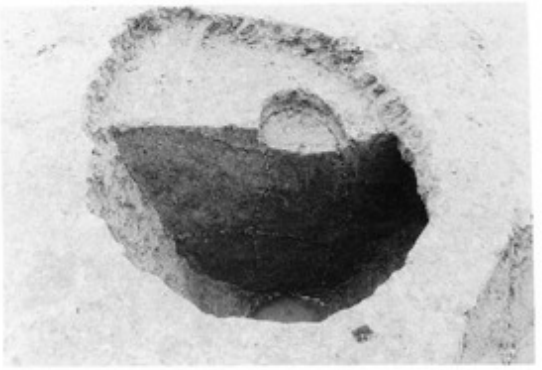
写真—12　ＳＩ—１竪穴住居跡貼床下検出遺構完掘状況(南より)



写真—13　ＳＩ—１竪穴住居跡掘方完掘状況(南より)



写真—14　ＳＩ—１竪穴住居跡柱穴断面
(Ｐｉｔ９—北西角—東より)

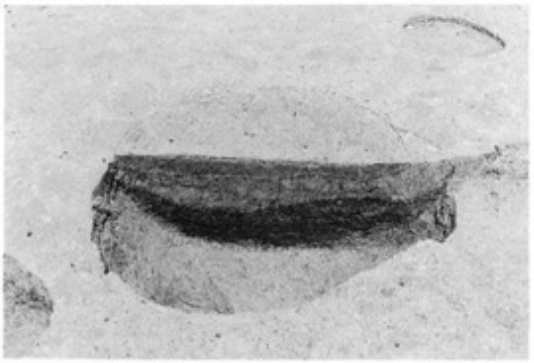


写真—15　ＳＩ—１竪穴住居跡柱穴断面
(Ｐｉｔ２—北東角—東より)

写真—16　ＳＩ—１カマド・煙道・遺物出土状況

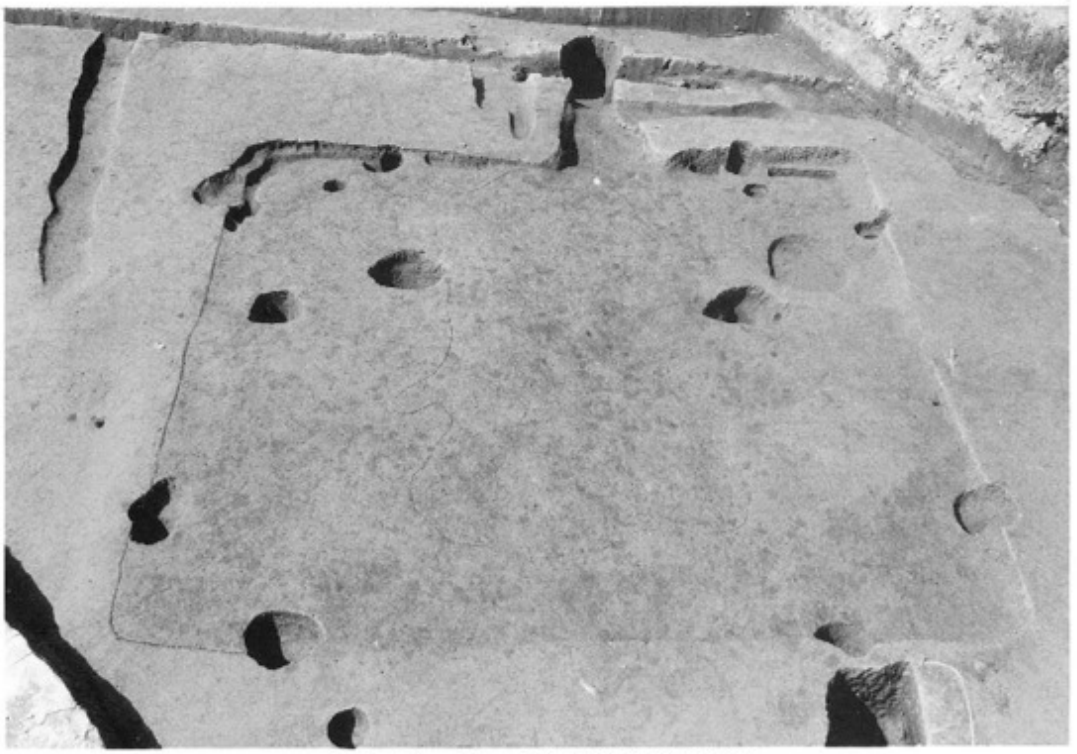
写真—17　ＳＩ—１カマド左袖縦断面(東より)

写真—18　ＳＩ—１カマド左袖横断面(南より)

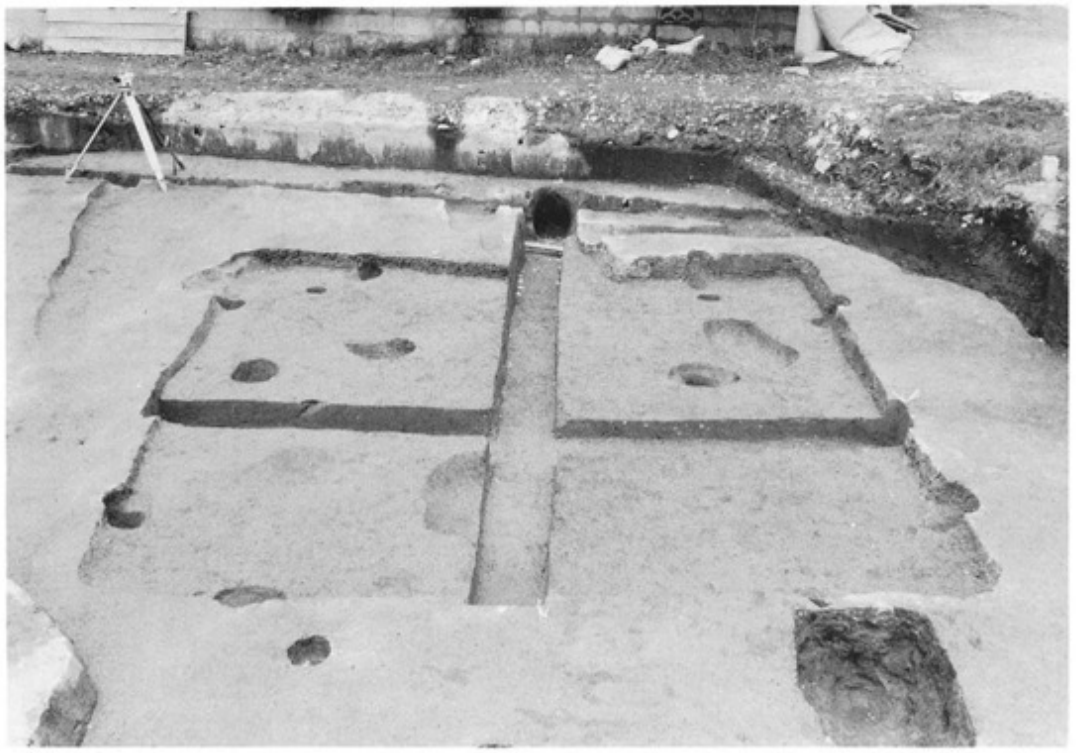


写真—19　ＳＩ—１内ＳＫ—９土坑断面(南より)

写真—20　ＳＩ—１内ＳＫ—13土坑断面(西より)

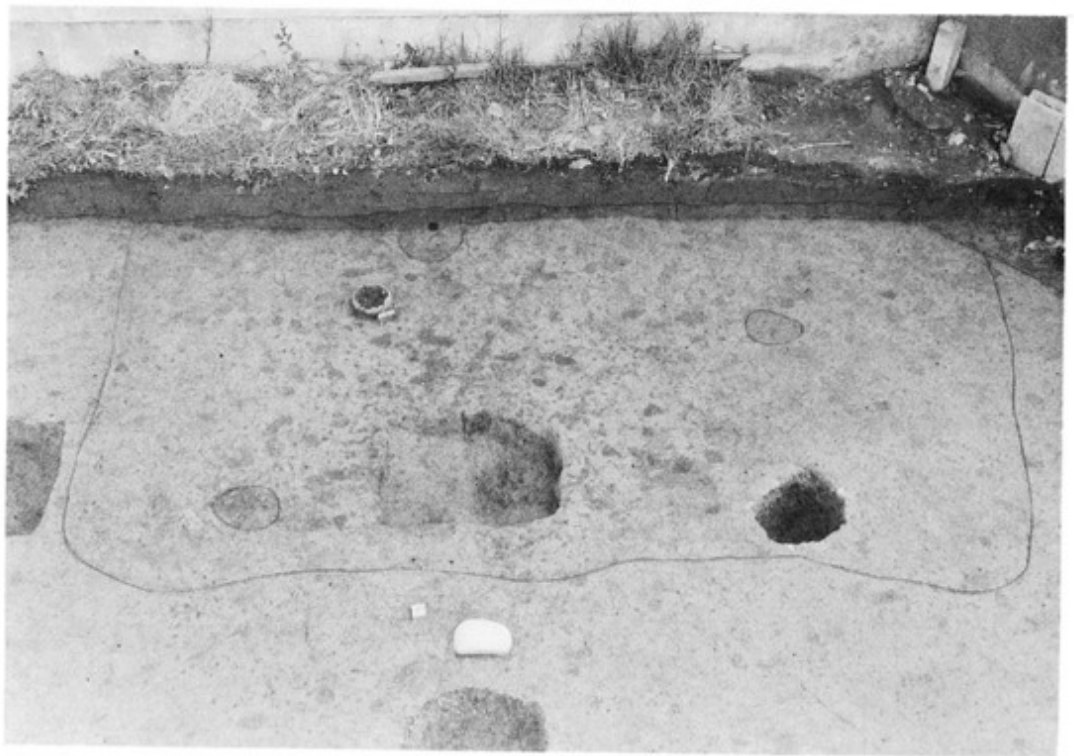


写真－21　ＳＩ－２竪穴住居跡完掘状況



写真－22　ＳＩ－２竪穴住居跡掘り方完掘状況

写真―23　ＳＩ―３竪穴住居跡遺物出土状況(南より)

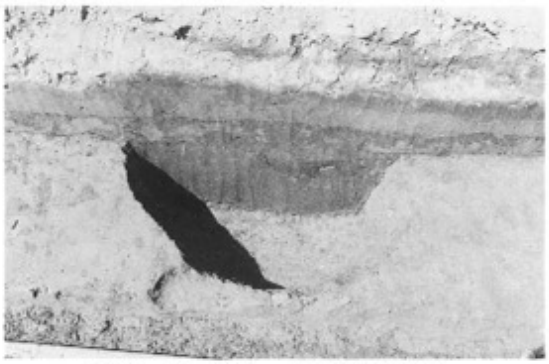


写真―24　ＳＩ―３竪穴住居跡床面検出状況(西より)

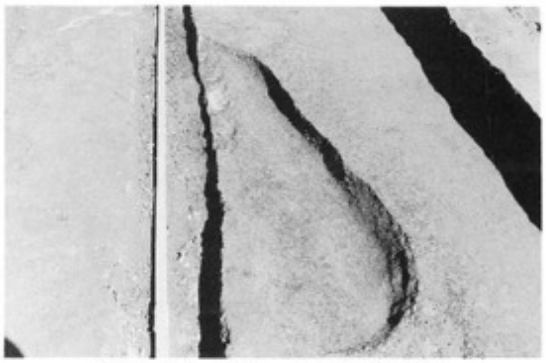
写真—25　ＳＩ—４竪穴住居跡支柱穴
（Ｐｉｔ２）断面（南より）

写真—26　ＳＩ—４竪穴住居跡床面検出・遺物出土状況（東より）

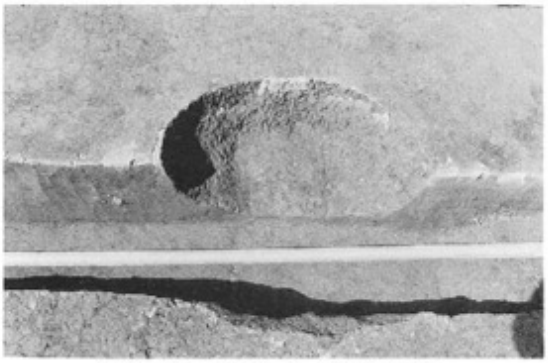
写真—27　ＳＩ—４竪穴住居跡掘方完掘状況・ＳＤ—６溝跡（北より）



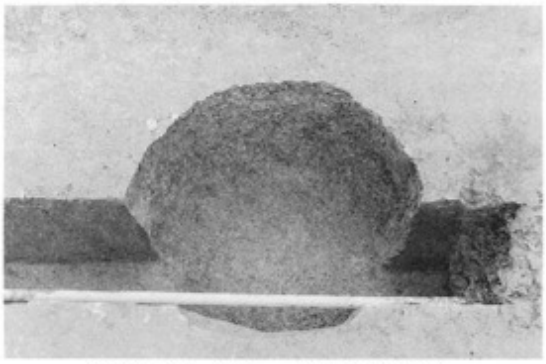
写真―28　ＳＫ－２土坑(南より)



写真―29　ＳＫ－３土坑(西より)



写真―30　ＳＫ－４土坑(南より)



写真―31　ＳＫ－５土坑(北より)

写真―33　ＳＸ－２遺構(西より)

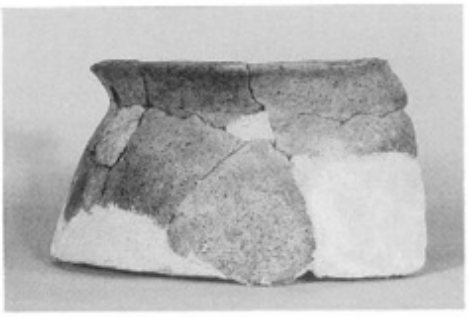
写真―32　ＳＫ－６土坑(西より)

2

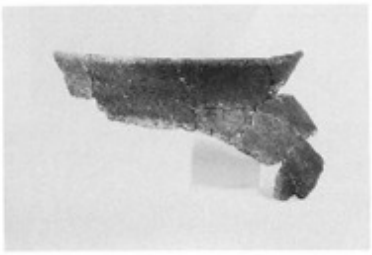
3

4

5



7



6

9

8

1．C－1（SI－1・1層）
2．C－2（SI－1内SK－3）
3．C－3
（SI－1内SK－3・5・7）
4．C－4（SI－3・床面）
5．C－5（SI－3・2層）
6．C－6（SI－3・2層）
7．C－7（SI－3・2層）
8．C－8（SI－4・床面）
9．C－9（SI－4・床面）

写真－34　非ロクロ土師器（1）

1

2

3

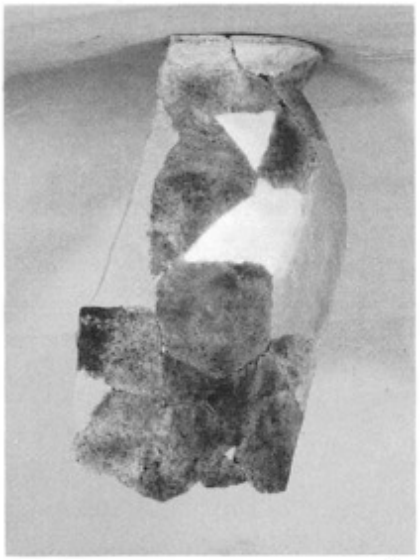
5

4

6

1．C－10(S I－1・2層)　4．C－B(S I－1・床面)
2．C－11(S I－1・2層)　5．C－14(S I－1・2層)
3．C－12(S I－1・2層)　6．C－15(S I－1・2層)

写真－35　非ロクロ土師器（2）

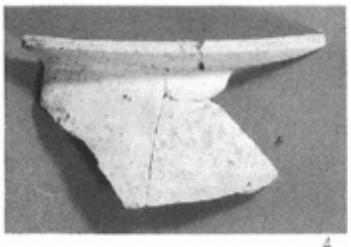


1

2

3

5

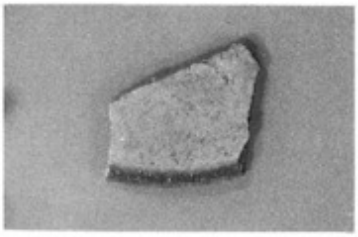


4

6

1．D－1（ＳＩ－1・2層）
2．D－2（ＳＩ－1・煙道）
3．D－3（ＳＩ－1内ＳＫ－9・3層）
4．D－4（ＳＩ－1内ＳＫ－3）
5．D－5（ＳＩ－4・床面）
6．D－6（ＳＩ－4・床面）

写真―36　ロクロ土師器　(2)



1

4

2

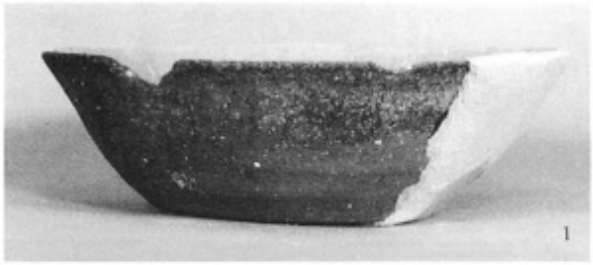
3

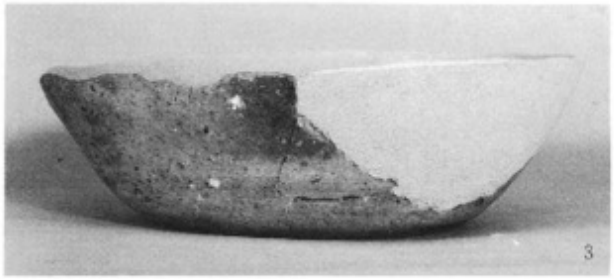
5

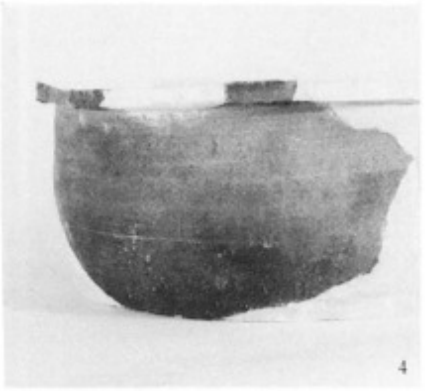
6

1．E－1（S I－1・1層）　4．E－4（S I－1・1層）
2．E－2（S I－1・1層）　5．E－6（S I－1・床面）
3．E－3（S I－1・1層）　6．E－7（S I－1・床面）

写真－37　須 恵 器（1）

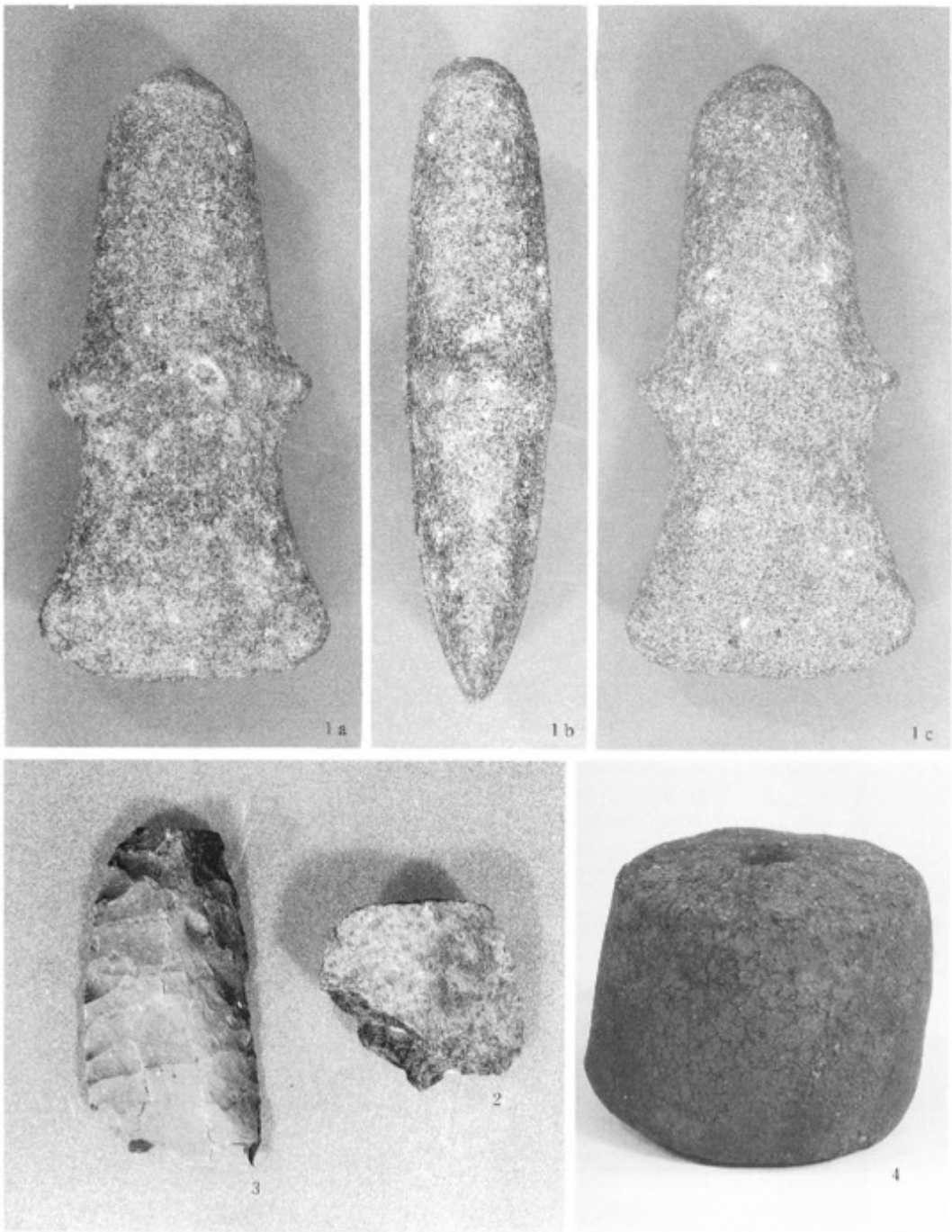






1．E－8（S I－1・P.2掘方）
2．E－9（S I－2・1～2層）
3．E－11（S I－4・煙道）
4．E－12（S I－4・床面）
5．E－13（S I－4・床面）
6．N－1（S I－1・1層）
7．N－2（S I－1・周溝）
8．N－3（S I－1・P.8掘方）

写真－38　須恵器（2）・鉄製品



1．K－1（表土）　　3．K－3（SI－1・1層）
2．K－2（SI－1・1層）　　4．P－1（SK－4・床面）

写真－39　石器・土製品

文 化 財 課 職 員 録

課　長　早坂春一

管理係		調査第一係		調査第二係	
係　長	鴇田義幸	係　長	佐藤　隆	係　長	加藤正範
主　事	白幡靖子	主　任	田中則和	主　任	熊谷幹男
〃	佐藤良文	教　諭	佐藤好一	教　諭	太田昭夫
〃	高橋三也	主　任	篠原信彦	主　事	佐藤　洋
〃	庄司　厚	〃	木村浩二	〃	佐藤甲二
		主　事	金森安孝	教　諭	小川淳一
		〃	吉岡恭平	主　事	渡部弘美
		〃	工藤哲司	〃	主浜光朗
		〃	斎野裕彦	〃	中富　洋
		〃	長島榮一	〃	平間亮輔
		〃	工藤信一郎	教　諭	高倉祐一
		〃	荒井　格	主　事	佐藤　淳
		教　諭	五十嵐康洋	〃	渡部　紀
		〃	渡辺雄二		
		主　事	大江美智代		

仙台市文化財調査報告書第153集

南　小　泉　遺　跡

平成3年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24－24　TEL 263－1166